Center for Global Studies on Culture and Society

Working Paper Series

CGS No.2025-03

金関丈夫の台湾時代と「渡来説」

Kanaseki Takeo's Taiwan Period and the "Migration Theory"

令和４年度グローバル社会文化研究センター
研究プロジェクトA　研究成果報告

研究期間：令和4年4月1日 ～ 令和6年3月31日

坂　野　　徹
泉　水　英　計
菊　池　　暁
角　南　総一郎

March, 2026

College of Economics, Nihon University

【目次】

【研究報告】

金関丈夫の故郷と親族―琴平町および金毘羅離宮……角南聡一郎　2
金関丈夫の京都（予報）……菊地暁　10
川平朝申宛書簡からみる金関丈夫の沖縄研究……泉水英計　18
金関丈夫の台湾時代と「渡来説」……坂野徹　33

【付録】

金関丈夫年譜……41

金関丈夫の故郷と親族
―琴平町および金刀比羅宮―

角南聡一郎

はじめに

筆者は、2017 年ごろから金関丈夫（1897～1983）の出身地である香川県仲多度郡琴平町を訪れることが何度かあり、金関の生家に関する情報が現地に何か残されていないかを探っていた。その一部始終はかつて少し述べたことがある（角南 2021)。ここでは、その後に文献などによって得られた情報・知見をあげ、金関の故郷との関わりや思い、その人間形成の背景についての概要を述べてみたい。

金関自身の記述や語り

金関丈夫自身は、その故郷や親族についてどのように記述や語りをおこなったのであろう。『お月さまいくつ』所収の「金関丈夫年譜」には、次のように故郷について簡単な紹介がある（金関 1980)。

> 明治三〇年(一八九七年)
> 二月一八日、香川県仲多度郡榎井村六九五番地で、父喜三郎、母たみの間の二男一女二の長子として生れる。家は曾祖父の代まで近郷の郷社の神職だったが、父は当時陸軍、国鉄、専売局などの建築請負を業としていた。

金関はその著作の中で、他所でも故郷や父に関する記述を遺している。以下に確認し得たものをみてみよう。

『民族学研究』6 巻 3 号には「香川県仲多度郡榎井村の童謡など」として、次のごとく金関の祖母から聞き取った童謡についての記録を述べた（金関 1940：94)。

> 昨年八十一歳で亡くなつた祖母に聴いておいたものを備忘のため報告します。このうち極く少数は明治三十年生れの私自身も記憶してゐますが、また半数位は明治十四年生れの母の知らぬものであります。

また、『民族学研究』7 巻 3 号でもその補遺が掲載されたが、金関はこれらをノートに記録していたことがわかる（金関 1941：51)。

> 本誌第六巻第三号の報告を整理したのちに、思ひがけなく別のノートから、やはり祖母にきいて誌しておいたものが、いくつか出て来たから、重複したのを省き（但し文句の一部の重複はそのまゝに)、また一部訂正を要する箇所を改め、追加として再度報告することにする。

金関は『芸能』4 巻 4 号で馬芝居について述べる中、次のように故郷を回述した（金関

1962：24)。

さて、私は明治三十年に、香川県仲多度郡榎井(えない)村で生れ、高等小学校の一年(いまの小学校五年)の終りまで、そこで育った。私が馬芝居を見たのは、その三年生か四年生ころの、冬のはじめだったと思う。阿波境の山々のいただきが、もう白くなりそめる、という頃である。村の旗岡神社の裏の苅田の上に、むしろ張りの小屋が建てられ、馬芝居はそこで興行された。

元来、私の生れた榎井という村は、琴平の門前町のつづきのような一筋町で、丸亀、多度津経由ではなく、高松経由で金比羅詣りをする人々は、これを通った。一九の膝栗毛の主人公たちも、これを通っているはずだ。裏の方には農家もあったが、街道に沿ったところには商家が多く、村の人々の気風は、農村風ではなかった。幕末のころ、博徒の親方であった日柳燕石を出した村で、そうした気風は、その頃も残っていた。

また、本稿で金関は馬芝居についてのこれまでの研究について、以下のように記している（金関 1962：24)。

馬芝居について記載した文献はほとんどない。(中略）ただ一つ松崎天民（中略）この人の自叙伝に、著者が少年のころ、作州津山付近でこれを見たことが記されている。

これは小説家・松崎天民（1878～1934）が、出身地である岡山県真庭郡落合町（現真庭市）で見たという次のような記述に依っている（松崎 1924：266)。

村に芝居小屋が出来ると、母は必らず一間の桟敷を買切つて、私や子守女を連れて見物に行つて居た。源之亟と云ふ馬芝居が来た時には「新金川屋様」とした紙片の貼つてある高い桟敷で、私は生まれて初めて、馬に乗つて演る芝居を見たりした。

九州文学社刊行の『九州文学』1 巻 5 号の「父の怪談」では次のように喜三郎の晩年についても述べられている（金関 1955)。

この怪談は、私の父の実験談である。そして当人から直接いく度も聞いた話である。必要な説明は加えるが、潤色はしないで、出来るだけ聞いたまゝを記そうと思う。但し、残念なことには、その折はたしかに聞いたはずの地名や人名を、ことごとく忘れてしまった。それで話が少しばやけて来はしまいかと恐れている。

その前に、私の父のことをちょっと紹介しておいた方がいゝかも知れない。父は軍人ではないが陸軍にながくつとめていた小役人で、六十いくつかで退職したあとも、数年のあいだ出雲の松江市の市役所につとめていた。はつきりとした年は、しらべて見ないとわからないが、昭和のはじめのころである。この話はその頃の出来ごとで、つまり六十何才の父の遭遇である。

私の父は元来酒のみで、その頃も相手さえあれば、一升酒は平気であった。性質はというと、男らしい、カラリとしたたちで、家は代々神職の筋であったが、若いと田舎住

いでありながらクリスチャンになつたというところから見ても、進歩的な人であつた。迷信家らしい点は少しもないばかりでなく、平常そうした習俗などには強い反感軽べつを示すような風であつた。いわゆる知識人ではなかったが、合理的な思考家であったようである。

それからも一つ付け加えておいた方がいいというのは、男らしいといつたが、それにはいくらか剛膽な、といってもいへような面も含まれていた。私は一生のあいだ、ものに恐れている父の姿を見たことがなかった。

父の性質については、まだ言い足りないことは沢山あるが、この物語りを理解する上に必要なことは、右にのべた位のところで充分であろう。とにかく、私の父には、平常神秘的な影は、露ほどもなく、また前後に、これに類するような不思議な話をしたことは、一度もなかった。読書家でもなかったから、いつとなしに書物から得られて、意識下に貯えられていたものが、仮装して再現した、というようなふしもない。それだけに、私には父のこの話が不思議に思えた。今でもそう思っている。(中略)

私もそうだが、父は生涯話下手で、作り話をして人を興がらすようなたちではなかつた。この話を父から、幾度か聞いたが、いつも細部まで前のと同じであった。この話を父の作り話だとは、私どもは思っていない。

父は七十二の年に卒中にかゝり、八十になってから少しづボケてきた、八十四で死ぬころには、完全にボケていたが、しかしこの話のようなことがあってからまだ十数年というものは、精神はたしかで、何の異常も見えなかった。(中略)

余白があるというから。ついでに記しておきたい。私は多年、自分で現地を訪ねて、土地の人の話をきく、父の話の実性をたしかめたい、と思っていた。しかし、その暇が一向やつて来そうにない。若し誰か特志の方が、私の代りにこれをやって下さると、大変ありがたい。若しそういう人があったら、先ず松江市役所へ連絡することである。そして、大火のあった年をたしかめ、その時に復興用の木材を購入したのが、石見のどの地で、どの港から船に積まれたかを知る必要がある。

それさえわかればあとは現地に出かけて、土地の人々から、それ以上のことを、わけなくき出すことが出来ると思う。この話が事実であつたら、B 家の人々は、たとい代変りになっていても、いまなお記憶しているにちがいない。それも、あまり後になると、どうなるかわからない。

こう書いているうちにも、私にはまた新に遊意が動いてきた。出来れば何とかして、自分でたしかめな（ママ）いものである。

朝日新聞記者・冨田辰男によるインタビューで金関は父喜三郎について以下のように語っている（冨田 1974)。

一族は清和源氏の末流。讃岐の神職が多く、金関家も曽祖父の代まで香川県仲多度郡榎井村、現在の琴平町で郷社の宮司だった。喜三郎さんは明治二十年、二十七歳のとき大阪の洋和造家学校で 四年間土木建築を学び、郷里で請負業を開く。得意先は主に陸軍施設や国鉄駅舎、専売局などで、 本格的な建築士として全国各地に腕をふるった。ところが真正直な性格から、大工や左官など下請けの監督もめっぽう厳しい。工事の手抜き

や資材の水増しなどは絶対に許さぬ。このため松江では、逆恨みした職人三人にやみ討ちを食い、血まみれになったほどだ。明治二十八年、三十五歳でキリスト者になった喜三郎さんは、この時すでに五十歳を越えてはいたが、持ち前の骨太で屈強な体力 はまだ衰えておらず、三人の男にからまれた一瞬「これなら勝てる」と思った。だが……ほおを打たれた瞬間に反対のほおを突き出していた。聖書のマタイ伝第五章がそっくり喜三郎さんの胸中に生きていた。

ある年のおおみそか、現金を盛った大きなカゴを玄関の敷き台に置いて「集金はご自由に」。当時は年一回のみそか勘定、材木屋や米屋、酒屋、八百屋などがつぎつぎと掛け取りに来るが、家族には「絶対、顔を出すことはならん！」。のぞき見したくて仕方のない丈夫少年。何回もふすまを 開けてはそのつど父にしかられた。元日、大福帳と引き合わせたところ、差引き勘定どんぴしゃりと合っていた。きっと父は、人の世の善意を形の上で教えたかったのだろう。

だが請負契約の駆引きやゼニ勘定など、しょせん喜三郎さんの得手ではなかった。日露開戦の翌年、十余年の家業を捨てて、薄給承知で陸軍善通寺師団の営繕課軍属になった。しかし、ここでも 資材購入の水増し書類に押印を拒んだために、主計将校の憎しみを買って、自らその職を去った。

両親の導きで幼児洗礼を受けた金関さんは中学当時、人道・理想主義を掲げて大正文壇を支配した「白樺」の影響などもあって文学に傾斜、三高時代はいっぱしのトルストイアンだった。だが、父の「学問をするなら実学をやれ」のひと言で大正八年、京大医学部に進んだ。ロシアの医師・作家チェホフに倣って「医者になれば……文学がやれる」と心ひそかに期するところもあったという。

金関喜三郎の名は、内閣官報局の編纂による『職員録』によれば、1908 年（内閣官報局編 1908：317）から 1922 年（内閣官報局編 1922：243）までは陸軍第十七師団司令部（岡山市津島・上伊福）の技手として、1925 年（内閣官報局編 1925：1145）から 1937 年（内閣官報局編 1937：1156）までは、松江市役所の技手として認められる。これらの記録は、先の金関自身による父・喜三郎の語りを補うものである。

仲多度郡の社家・金関家

1964 年刊行の『讃岐郷土研究』8 巻によれば、旧榎井村字旗岡の春日神社と旧象郷村大字苗田字吉川の石井神社の現宮司は「金関保」とある（荒井編 1964）。『琴平町家系人名録』によれば、金関保は 1894 年の生まれで、香川県師範学校を卒業後、訓導および校長を務め、前述の宮司を経て金刀比羅宮権宮司となった（堀川 1965：34）。

また、『新修満濃町誌』（満濃町誌編さん委員会・満濃町誌編集委員会編 2005）によると、琴平町の旧郷社は大井八幡神社。当社の歴代神職は金関家であったという。さらに金関家は、満濃町所在の若林神社、八幡神社、瀧鼻神社、中村神社、高篠天満宮、雲氣八幡宮、富隈神社、丸王神社の神職を務めるともある。加えて本書では『祠官金関氏系譜』の存在が示されている。『香川県の地名』の「東高篠村」の項では、金関家蔵『祠官金関氏系譜』が取り上げられている（平凡社地方資料センター編 1989）。『祠官金関氏系譜』は金関丈夫の生家が、具体的にどのような神社に関わったかを紐解く手掛かりとなるであろう。

『琴平町史』1 集によれば明治初年の頃、大井八幡神社では金関家によって寺子屋が運営され、40 人ほどがここで学んだという（大﨑編 1970：79)。

また、仲多度郡まんのう町七箇の風流踊「七箇念仏踊」については、大井八幡神社の「神官であった金関家の資料などにも基づいて記述されたものである」（大林 1987：143）という。ここでも『祠官金関氏系譜』が参照されたと見てよかろう。

金関丈夫とこんぴら

著述にみる金関と神道との関係は、神話を通じてのものである（金関 1957、金関 1964、金関 1966a、金関 1966b、金関 1996 など)。金関は神話研究者としても著名であり、そのアプローチは比較神話学的立場からのものだった。

山陰民俗学会の会誌『伝承』12 号に掲載された「箸・櫛・つるぎ」では、次のような金関の神話観が述べられている（金関 1964：8)。

> 最後に一言つけ加えたいことがある。右の文中に、いくつかの中国の事例を、ことさらに引用しておいた。日本の民俗学者の嫌いそうなことである。しかし、ことは農耕民の儀礼に属している。農耕の風習は大陸から伝わったが、その儀礼は大陸とは無関係だ、というようなわがまゝ考え方は、その方がよっぽどおかしい。日本の稲作文化の故郷とも見られている地方に、炊かれた米の霊力を利用して、いけにえの少女が、自らの智力で悪蛇から身を救っている話がある以上は、オロチ退治のいまの形から見て、これがペルセウス説話だというような神話学には、まだしばらくはそっぽを向いていてもいゝかもしれんが。

先述した金関の馬芝居の記憶を補う人物として「従弟の近石武一君」と「これも私の従弟だが、同年生れの綾利平君」が登場する（金関 1962)。彼ら従弟は、共にこんぴらとは深い関係にある人物であることが確認できた。以下にその概要を記しておこう。

郷土玩具研究者・加藤増夫（1895～1973）は『讃岐郷土玩具考』で、「道者人形」について次のように記している（加藤 1932：44-45)。

> 道者人形　道中人形ともいふものがあります。昔の金毘羅参詣の赤ゲット姿の人形であります。木製一刀彫、高さ三寸、四寸位の種類があります。金毘羅参りの姿で、笠をかぶりたるもの、笠を背負ふてゐるもの、笠なしで頬冠りしてゐるもの等があり、いづれも金毘羅さんのまる金しるしの御札を首からかけてをります。作者は、谷口寸齋の門下で、榎井村の人、近石武一が、昭和五年十月頃に製作し、翌昭和六年十一月ごろから小田象麓堂から販がれてゐるものであります。

加藤によれば道者人形は「木彫に泥絵具彩色」であったという（加藤 1933：91)。谷口寸齋（仙堂）は、琴平町札の前に店を構え「一刀彫り達磨」を製作したことでよく知られている（加藤 1950、加藤 1973)。谷口仙堂時代の作品は、「源平人形」が画家で郷土玩具研究者でもあった武井武雄（1894～1983）の『日本郷土玩具 西の部』に、「新しいお土産もの」として紹介されている（武井 1930：240)。

また、『琴平町史』1集には、「琴平、榎井に三十有余の彫刻師を（ママ）現在（ママ）している。中でも現在の二代目山中象堂、近藤（ママ）武一、柴田匠堂など優であり、展覧などにも、輝いている」（大﨑編 1970：44)、『日本の伝統工芸』10巻には「讃岐一刀彫宗家二代目山中篤などの努力によって、現在その伝統技術が脈々としてこの地に息づいている。その前後に活躍した近石武一も名人である」（佐藤 1985：43)、などと述べられており、彫刻師としての近石武一の活動がうかがえる。讃岐一刀彫は、1837年の金毘羅権現旭社建立の折、宮大工によってはじめられたとの伝承がある（市原 1989：348)。

演劇に造詣の深かった、高松高等裁判所長官（当時）の石田壽（1895～1962）は、1958年に「金丸座」を日本に現存する最古の本格的な芝居小屋であると評価し、琴平町出身の郷土史家・草薙金四郎（1905～1990)、人形浄瑠璃文楽研究者・近石泰秋（1907～1993）ら県内の有識者に働きかけて「金丸座」保存運動の契機となった（井上 1982：8、草薙・近石・湧田 1976)。保存運動の結果、1970年に旧金毘羅大芝居(金丸座)として国の重要文化財に指定された。また、芸能評論家・山川静雄によると1958年に「琴平町の大工の綾利平さんの家から、なんと、金丸座の設計図が見つか」ったという（山川 1994：165)。『重要文化財旧金毘羅大芝居修理工事報告書』には特に綾家やその所蔵資料についての言及はされていない（文化財建造物保存技術協会編 1976)。

一方で『琴平町史』1集には次のようにある（大﨑編 1970：47)。

> 金刀比羅宮をはじめ諸建物の工匠に、当地に来っ（ママ）た綾九良右衛門は、昭和に至る迄累代この地の棟梁をつとめた家柄であった。初代は金丸座などとも関係し、古い絵図面を伝承した家であり、高松松平侯への（ママ）いわれある家の絵図面を差し出したりした。

「平成三年図書館参考事務控簿」に1991年「十二月二十日琴平町、近藤義孝氏。当宮で大工職を勤めた綾家旧蔵の寺社建築関係絵図面を示される」とある（松原 1992：203)。また、金比羅芝居に関する史料の一つとして、「明治五年壬申十月芝居算用仕上帳」があるが（草薙 1985)、現存する原本の所蔵者として「近藤義孝」の名がみえる（小汐 1997：46)。

綾家のルーツは塩飽本島泊の大工・山下家で、後に琴平町に在住し綾氏に改めた。綾家は金毘羅大権現のお抱え大工となり、琴平町高藪・綾坦三（豊矩）は。1859年の金刀比羅宮高燈寵、1877年の金刀比羅宮本宮の1875年の金刀比羅宮別宮の際の大工棟梁であった（高倉・三宅 2017、金刀比羅宮編 2024)。

綾坦三の直系である綾利平は1963年に没し、宮大工としての綾家は絶えたという（大崎1973：13)。金関丈夫と同年生まれであったので、利平は1897年に出生し1963年、66才で亡くなったことになる。

二人の従弟の存在は、金関が民芸や民俗に目を向ける契機となったのではなかろうか。興味対象が有形に留まらないことは、こんぴらの存在が潜在意識下にあったのかもしれない。金刀比羅宮社報『こと比ら』36号には、1980年7月31日に「天理市・金関丈夫氏参拝来社」とある（無記名 1981：230)。1980年は金関の晩年といってもよい時期である。その頃にも金関は故郷を訪れ、金刀比羅宮に参拝していたことは重要であろう。

おわりに

ここでは、金関丈夫の遺した記述をてがかりとして、金関の故郷観や実際の関わり、そしてこんぴらとの接点を模索した。キリスト教徒であることがよく知られるため、神道や神社との関係が言及されることは少なかった金関ではあるが、そこには浅からぬ関係が見て取れた。一方で金関の神話研究にみられるように、神道や民俗を内向きなものとして捉えるのではなく、グローバルな視点をもって捉えていたことは今でも光を放っているものであろう。あたかも現代の SNS で頻繁に目にする、根拠が不明確な部分的な切り取りではなく、われわれは金関のそうした背景も含めた全体像を踏まえて、なされた研究を正しく評価する必要があると考える。

【文献】

荒井とみ三編 1964『讃岐郷土研究』8 讃岐郷土史研究会
市原輝士 1989「第三部 伝統と文化遺産 第一章 ふるさとの伝統 伝統工芸」『香川県風土記』旺文社 pp.348-349
井上三郎 1982「旧金毘羅大芝居について」『法曹』377 pp.2-9
大崎定一 1973「天保八年建立のこんぴらの金堂：いまの旭社について」『こと比ら』28 pp.13-17
大崎定一編 1970『琴平町史』1 琴平町史刊行会
大林英雄 1987「滝宮念仏踊七箇村組について(一)」『こと比ら』42 pp.143-156
加藤増夫 1932『讃岐郷土玩具考』香川県教育図書出版株式会社
加藤増夫 1933『郷土玩具叢話』香川県教育図書出版株式会社
加藤増夫 1950「鳩笛庵隨筆 続」『こと比ら』3 pp.12-13
加藤増夫 1973「こんぴらの古玩：一刀彫り達磨」『こと比ら』28 pp.45-46
金関丈夫 1940「香川県仲多度郡榎井村の童謡など」『民族学研究』6-3 pp.94-109
金関丈夫 1941「香川県仲多度郡榎井村の童謡など（追加)」『民族学研究』7-3pp.51-61
金関丈夫 1955「父の怪談」『九州文学』1-5 pp.14-17
金関丈夫 1957「毛抜、蝉丸、逆髪」『芸林』4-3 pp.17-20
金関丈夫 1962「馬芝居」『芸能』4-4 pp.24-25,29
金関丈夫 1964「箸・櫛・つるぎ」『伝承』12 pp.2-8
金関丈夫 1966a「海幸･山幸の話」『国文学解釈と鑑賞』31-7 pp.216-217
金関丈夫 1966b「倭建命」『国文学解釈と鑑賞』31-9 pp.214-221
金関丈夫 1980『お月さまいくつ』法政大学出版局
金関丈夫（大林太良編） 1996『新編木馬と石牛』岩波書店
小汐明子 1997「芝居興行と地方経済：金毘羅社領の事例」『演劇研究会会報』23 pp.30-47
草薙金四郎 1955『金丸座：現存最古の劇場』香川県教科図書株式会社
草薙金四郎 1985『金毘羅大芝居のすべて』高松ブックセンター
草薙金四郎・近石泰秋・湧田森徳 1976『旧金毘羅大芝居復元竣工記念論攷』琴平町教育委員会
金刀比羅宮編 2024『金刀比羅宮本宮地域建造物調査報告書』金刀比羅宮
佐藤吉隆 1985「独創の意匠：讃岐一刀彫」『日本の伝統工芸』10 ぎょうせい pp.42-43

角南聡一郎 2021「相棒との対話：金関丈夫先生をめぐる四方山話より」『台湾原住民研究』25 pp.233-242
高倉哲雄・三宅邦夫 2017『塩飽大工：いま語り継ぐ先人たちの気概と誇り』塩飽大工顕彰会
武井武雄 1930『日本郷土玩具 西の部』地平社書房
冨田辰男 1974「金関丈夫さん」『父ありき』創元社 pp.187-190
内閣官報局編 1908『職員録 甲 明治四十一年五月一日現在』印刷局
内閣官報局編 1922『職員録 大正十一年七月一日現在』印刷局
内閣官報局編 1925『職員録 大正十四年七月一日現在』内閣印刷局
内閣官報局編 1937『職員録 昭和十二年七月一日現在』内閣印刷局
文化財建造物保存技術協会編 1976『重要文化財旧金毘羅大芝居修理工事報告書』琴平町
平凡社地方資料センター編 1989『日本歴史地名大系 38 香川県の地名』平凡社
堀川碧星 1965『琴平町家系人名録』日本郷土学会
松崎天民 1924『人間秘話：記者懺悔』新作社
松原秀明 1992「平成三年図書館参考事務控簿」『こと比ら』47 pp.196-203
満濃町誌編さん委員会・満濃町誌編集委員会編 2005『新修満濃町誌』満濃町
無記名 1981「社頭往来」『こと比ら』36 pp.228-231
山川静夫 1994『歌舞伎の知恵』演劇出版社

金関丈夫の京都（予報）

菊地暁

はじめに

金関丈夫は「西日本の人」である。明治 30（1897）年 2 月 18 日、香川県仲多度郡榎井村（現琴平町榎井）に生まれた金関は、幼少期、建築業者だった父の任地を転々とする。小学校入学前に岡山市に転居、さらに祖父母宅のある福岡市で小学校に入学し、のち岡山市に転校して明治 42（1909）年、小学校卒。中学校は島根県の旧制松江中学校に進み、そのまま卒業。第三高等学校を経て京都帝国大学医学部に進み、大正 12（1923）年卒業、医局に勤めながら昭和 5（1930）年、学位論文「琉球人の人類学的研究」により学位取得。その後、2 年間のヨーロッパ留学を経て昭和 11（1936）年、台北帝国大学医学部教授着任。以後、昭和 24（1949）年の引き揚げまで台北を拠点に活動。帰国後は、昭和 25（1950）年より九州帝国大学医学部、昭和 35（1960）年より鳥取大学医学部教授、昭和 37（1962）年より山口県立医科大学教授を歴任。昭和 39（1964）年、手塚山大学教養学部教授となり奈良県に転居、昭和 58（1983）2 月 27 日、この地で 85 歳の生涯を終えている（以下、年譜事項は金関丈夫博士古稀記念委員会編 1968『日本民族と南方文化』平凡社の所収年譜に依る）。香川→岡山→福岡→岡山→島根→京都→台湾→福岡→鳥取→山口→奈良と、「外地」台湾を含め、生涯を「西日本」で過ごしたわけだ。

なかでも金関に多大な影響を与えたのが、京都であることは間違いない。大正 5（1916）年の第三高等学校入学から、京都帝国大学医学部での学位取得を経てヨーロッパ留学に出発する昭和 9（1934）年まで 17 年間を過ごした京都は、最晩年を過ごした奈良に次いで長く暮らした土地である。金関が京都で多感な青年期を送り、学問的基礎を築いたことは、非常に興味深いポイントであり、先に結論を述べれば、『民俗台湾』（1941-45）に代表される金関のミンゾク学（民俗学、民族学）を方向づけたのも、京都の学問的ネットワークにほかならなかったといえよう。

以下、ミンゾク学への影響という視点から、京都における金関の足跡をたどり直し、その学問的ネットワークに光を当ててみたい。

キリスト教

金関は曾祖父の代までは神主だったが、父はメソジスト教会の信徒であり、本人の記憶ははっきりしないものの、幼児洗礼を受けていたらしい。年譜には「大正二（1913）両親とともに聖公会松江基督教会に転籍、爾来永野武二郎牧師より強い影響を受ける。教会では模範少年、学校では軟文学の不良少年ということになる」「大正三（1914）五月　英人宣教師ヒウ・Ｊ・フォス牧師により按手式をうける。またこの秋、松江教会の創立者バークレー・Ｆ・バックストン老師の来朝あり、その説教に霊感をうける。この頃、日曜学校の聾唖生徒のクラスを受けもつ」とあり、旧制中学の頃には既に自覚的な信徒として活動していたことが分かる。

このことは、金関の京都生活にも大きく作用する。ＹＭＣＡの学生寮「地塩寮」で暮すことになるからだ（図１）。京都市左京区の東一条通り沿いにある地塩寮は、明治 31（1899）

年に創設された京都大学キリスト教青年会が大正 2（1913）年に設立した自治寮であり、W・M・ヴォーリズの設計になる建物は、現在、登録有形文化財となっている。金関は、第三高校時代の三年間と、京都帝国大学医学部時代の大半をここで過ごしたようであり、そのことは、金関丈夫 1941「思い出いろ／＼」（京都帝国大学基督教青年会四十周年記念誌編纂委員編『京都帝国大学基督教青年会四十周年記念誌』京都帝国大学基督教青年会）に記されている。当時の地塩寮の雰囲気を、次のように回想している。

大学青年会には既に先輩の佐原六郎、伊藤祐之君などが居り、先きの松田君などもゐたので、別に新しい所にはいつたやうな感じはしなかつた。且つはいる前から僕と云ふ人物の宣伝もゆきとゞいてゐたと見えて、入舎の最初の朝の祈祷会をすつぽかして朝寝坊をしても、別に人々は不思議がらなかつた。いま住友にゐる藤井亨君などは「果たしてきゝしにたがはぬ横着物だわい」と云ふ意味のことを僕に云つてゐたが、感心してゐるのだらう位に思つてゐた。（45）

こんな思ひ出話を書いてゆけば際限がないが、一たいに当時の大学青年会にはよほど「ひらけた」人が多かつた。之れに比べると三高青年会の方は比較的ピユーリタン的であり、鍵屋へお菓子をたべにゆくのが罪悪であるか否かが討論されるといふ風であつたから、僕のやうに生れついた人間がその中で型にはまつた生活をして来たのは考へて見るとやゝ滑稽でもあり、事実窮屈でもあつたのであるが、大学青年会に移つてからはその点が非常に楽になり、急に大人になつたやうな気がした。いやな話をするやうだが、例へばオナニーの問題なども、以前はまぢめに煩悶してゐたのが、此処へはいつてからは冗談半分の話になつてしまひ、ほつと救はれたやうな状態であつた。この救済には岡崎［文規、人口学者、後に厚生省人口問題研究所の所長を務める］さんなどの力が大いに与つてゐると思う。（47）

ほかにも興味深い記述が多い。多士済々の寮生とともに、貧民地区の福祉活動に従事し、あるいは、旅行に興じ、美術や音楽や演劇に親しみ、クリスマス会にはドイツ語でゲーテの戯曲を上演したといったエピソードが記される（図２）。

金関は、寮を訪れる多彩な訪問者にも言及している。

一方では当時売出しの新人会の闘士で早坂［二郎］、赤松［克麿］などと云ふこはい人々を青年会にひつぱつてきた。（50）

当時の青年会には国際的の空気もかなりあつて、今は世界的の名士である胡適などの一団と卓をかこんだ事もあつた。（53）

青年会の主催の音楽会では、黒人の合唱家を服部武雄君がひつぱつて来たのが成功であつた。（54）

催し物と言へば有島武郎や野村愛生を誰かゞ連れて来て文芸講演会をしたことがあつ

た。(54)

伊藤君が私淑してゐた一燈園［京都市山科にある修道団体］の［西田］天香さんをひつぱつて来て座談会をしたこともあり、その後一燈園の人々は時々会館の掃除に来て呉れるやうになつた。(54)

政治家、芸術家、宗教家など、国内のみならず海外からの訪問者も少なくなかったことがうかがえる（寮生にも中国・朝鮮からの留学生がいた)。左京区・百万遍近辺は、今日でも多様な人が交錯するコンタクトゾーンだが、そうした情景は当時からのものだったといえよう。こうした環境が、金関を育む知的土壌となったわけだ。

民藝運動

大正 12（1923）年 7 月に京都帝国大学医学部を卒業した金関は、そのまま解剖学研究室助手となる。翌年 3 月、「新潟県人小野鈴蔵の四女みどりと結婚する。爾来岳父について古美術の上で指導を受ける」（前掲年譜より)。岳父・小野鈴蔵は、新潟県出身、私立長岡女学校で教員を務めた後、京都の聖公会で事務職を従事した。金関も聖公会に所属していたことから、教会人脈が取り結んだ縁といえよう。年譜にある通り、岳父は漢詩文や古美術に造詣が深く、そのコレクションは京都国立博物館にも寄贈されている。大正 14（1925）年 11 月 15 日、喜田貞吉が主宰する史学地理学同好会の第 72 回史跡踏査には、小野と金関も参加しており（小酒井儀三「第七十二回史蹟踏査會概況」『歴史と地理』17/1、1926 年 1 月、図 3)、「岳父について古美術の上で指導を受け」ていた様子がうかがわれる。

古美術趣味から民藝運動に加わったのも京都時代のことである。そもそも民藝運動は、関東大震災を逃れて京都に移り住んだ柳宗悦が、河井寛次郎、富本憲吉、濱田庄司らとの交流から「民藝」の語を生み出し、大正 15（1926）年 4 月、4 人の連名で「日本民藝館設立趣意書」を発表したことから本格化する運動であり、じつは、京都発の文化運動である。

金関が柳の知遇を得た経緯は不明だが、民藝運動のメンバーの一人・外村吉之介（1898～1993）が仲介したのではないか、と金関丈夫の孫・金関孟は推測している（2024 年 9 月 7 日、瀬戸市立図書館における講演「金関丈夫と民芸運動」に依る)。後に倉敷民芸館長を務める外村の本業は牧師であり、昭和 2（1926）年、関西学院大学神学部を卒業した外村は、京都ＹＭＣＡ主事を務めており、この際に柳の知遇を得て、さらに金関とも知り合い、金関を柳に紹介したのではないかという。これもまた教会人脈だったわけだ。

昭和 4（1929）年には、金関丈夫、菅吉暉、鈴木庸輔、中村直勝（日本史家、第三高等学校教授／京都帝国大学文学部助教授)、山田保治、湯浅八郎（昆虫学者、当時は京都帝国大学農学部教授、のち同志社総長、国際基督教大学初代総長）の 6 名を発起人として京都民芸同好会が組織され、1933 年 4 月 15・16 日には京都大丸百貨店にて「第 1 回民芸品展覧会」を開催している。(ブログ「神保町系オタオタ日記」2021 年 5 月 25 日記事「金関丈夫、中村直勝、湯浅八郎らが創設した京都民芸同好会の民芸品展覧会」)。この会は、昭和 12(1937)年の第 5 回まで続けられ、金関は自ら所蔵する陶器などを出品している(図 4)。

民藝運動への関与は台湾に渡ってからも続く。金関が主宰する『民俗台湾』誌(1941-45)に「民藝解説」を連載（写真は松山虔三)、さらに昭和 18（1943）年 3～4 月には、台湾を

訪れた柳宗悦の案内役を務めている。大戦末期、本土からの生活物資輸送が断たれると、総督府の委嘱により台湾産生活雑貨の調査・活用に従事したという（立石鉄臣・池田敏雄・山中繁男・原吉郎 1965.07「座談会 台湾の民俗と民芸を語る」『民芸手帖』86）。

金関の美術愛好とりわけ民藝運動への関与は終生続くが、その起点も京都にあったわけだ。

考古学

金関のミンゾク学を考える上で最も重要な契機は、考古学との出会い、より正確に言えば、濱田耕作との出会いだった。その経緯を、金関は次のように語っている。

> 大正十二年七月、京大医学部を出て、解剖学教室の助手になり、指導教授の F 先生から貰った最初の、そして最後の研究テーマは、鼠の尻尾を動かす腱の構造だったが、見事に失敗したとみえ、論文は手元に帰らない。次のテーマも貰えない。しょげているのが、同じ教室の足立文太郎教授の耳に入り、先生は私を呼んで、人類学をやる気はないか、と言われる。このような事をいまここで言うのは、実はこれが浜田耕作先生に拝面する、そもそものきっかけになったからである。
>
> 翌年一月、足立先生から、隣教室の清野謙次先生に紹介され、清野先生は私を呼んで、「君は文学部考古学教室の陳列室をのぞいたことがあるか」と言う。ない、という答えに驚いて、立ち上がったその足で、先生は私を考古学教室に引き連れ、浜田先生に紹介してくれた。これが初めての拝顔だった［…］（金関丈夫 1979［初出 1976］「浜田耕作先生を懐う」『孤灯の夢』法政大学出版会、31）

足立文太郎、清野謙次の紹介で京都帝国大学文学部・考古学教室の初代教授・濱田耕作（1881～1938）を訪れたのは、大正 13（1924）年 1 月ということになる。この縁で、昭和 2（1927）年からは文学部で人類学の講義を担当、欧米留学で中断するが、台北帝大着任後の昭和 13（1938）年以降も続けられることとなる。

ここで考古学研究室が含まれる京都帝国大学文学部史学科について確認しておこう（拙論 2008「京大国史の「民俗学」時代―西田直二郎、その＜文化史学＞の魅力と無力―」丸山宏・伊従勉・高木博志編『近代京都研究』思文閣出版、拙論 2009「敵の敵は味方か？―京大史学科と柳田民俗学―」小池淳一編『民俗学的想像力』せりか書房など参照）。京都帝国大学文科大学（後の文学部）は明治 39（1906）年設立。翌年設立の史学科には、国史（内田銀蔵、三浦周行）、東洋史（内藤湖南、桑原隲蔵、羽田亨）、西洋史（坂口昴、原勝郎）、人文地理（石橋五郎、小川琢治）、考古（濱田耕作）の五専攻が設けられる。史学科 5 専攻は分野間の相互交流が活発で、また、考古や地理といった多様な形態の資料に対する関心も高く、「政治史」中心の東大に対抗して「文化史」を標榜し意気盛んだった。この史学科で人的交流の結節点となったのが「陳列館」であり、この建物に史学科五専攻の研究室、図書室、資料室が集まった（図 5）。とりわけ、浜田の主催する考古学教室は、学内のみならず新聞記者、芸術家などさまざまな人々が訪れ、「カフェ・アルケオロジー」と通称されるほどで、金関は、この「カフェ・アルケオロジー」の常連となる。

その後は一週間に一度は、たいてい、考古学教室に推参した。何曜日だったかは忘れたが、その日はいろいろの人が、研究室の中央の円卓に集まり、先生を囲んでにぎやかな午後を過ごした。客は考古学者は少なく、学内の諸先生―なかでも小川琢治教授［人文地理学教授、のち、理学部自然地理学教授］のお顔はしばしば見られた―その他学外の珍客が多かった。私はこの集りで考古学の知識よりは、それ以外のいろいろ有益な知識を得たと思っている。その後、この円卓の評判が世間にひろがったのは、たしか毎日新聞社の岩井武俊氏が、この場に「カフェ・アーケオロジア」の名号を与えて新聞に載せたからである［…］。

浜田先生が日本最初の考古学教室を創立したときに、その学風設立の模範となったのは、先生が留学されたロンドン大学のサー・フリンダース・ペトリー教授のそれだと聴いている。午後になると集まって茶を飲むその国の風習が、この「考古学カフェー」設立に影響したであろうことは想像できるが、しかし、それよりも本筋の、もっと大切な学問そのものが、ペトリー教授から移されている。（金関丈夫 1979［初出 1976］「浜田耕作先生を懐う」『孤灯の夢』法政大学出版会、32）

ロンドン大学・ペトリー教授のティー・サロンが、濱田によって京大考古学教室に移植されたということだ。そして、その常連だった金関が、今度は台北帝国大学で多士済々のサロンを主催することになるわけで、金関サロンは「カフェ・アルケオロジー・台北支店」なのだ。

ちなみに、濱田サロンと金関サロンの類似は、金関の学問的同伴者だった国分直一も証言している（1990 年に安渓遊地が作成した作品「國分直一博士に聞く・台湾で活躍した人類学者群像 2 」、youtube［https://www.youtube.com/watch?v=cjCchhGhSRI&t=16s］で視聴可能）。国分は京大国史の卒業生（1933 年卒業）であり、後述する京大民俗学会の参加者でもあった。

民俗学

京大史学科の活発な学祭的交流を背景に、昭和 2（1927）年 12 月、京都帝国大学民俗学談話会が設立され、これが民俗学研究会を経て民俗学会となる。当時の「文化史学」ブームを主導した国史学教授・西田直二郎（1886～1964）を中心とした同会は、国史学のみならず他専攻からも多くの学徒が集まり、考古学、地理学、人類学、言語学、歴史学など、狭義の民俗学にとどまらない幅広い分野にわたる活動を展開した。金関も熱心なメンバーであり、昭和 4（1929）年 3 月 15 日には「沖縄見聞談」、同年 6 月 15 日には「日本石器時代人の変形頭骸に就いて」をそれぞれ報告している。また、昭和 3（1928）年 9 月には上京の際に柳田国男の知遇を得ており、以後、上洛した柳田が京大民俗学会に参加する際は、必ず出席している（図 6 ）。

以上を踏まえると、分野や所属を問わず、台湾民俗に関心を有する人々が集う金関サロンは、「カフェ・アルケオロジー・台北支店」もしくは京大民俗学会の台湾版であり、その最大の成果が『民俗台湾』だったといえよう。京都で育まれた人脈は、金関のその後に大きく作用していたわけだ。

このような視点から『民俗台湾』を読み解くことが筆者の意図だが、詳細は今後を期す

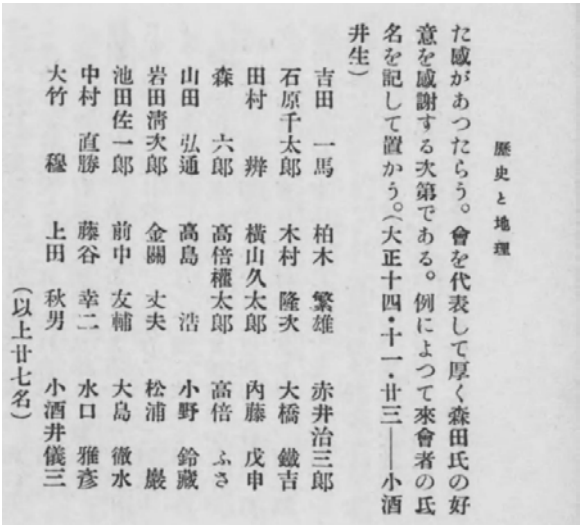
こととする。



図 1　地塩寮



図 2　金関が寮生と狂言を演じた際の記念写真。京都大学キリスト教青年会百周年記念事業委員会記念誌部会編 2003『地塩洛水 : 京都大学 YMCA 百年史』京都大学キリスト教青年会より。

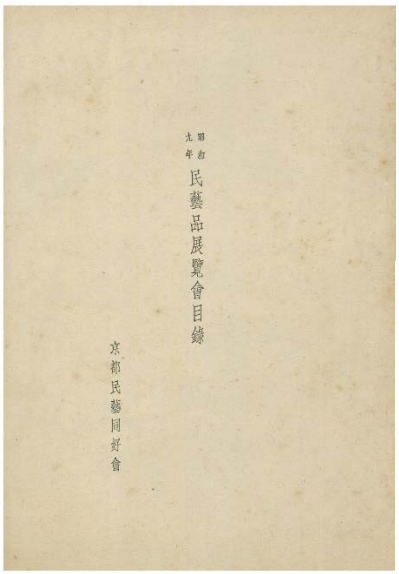


歴史と地理

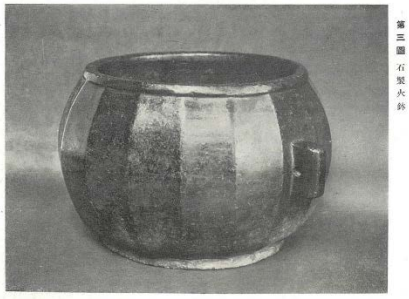
た感があつたらう。會を代表して厚く森田氏の好意を感謝する次第である。例によつて來會者の氏名を記して置かう。（大正十四・十一・廿三――小酒井生）

吉田　一馬　柏木　繁雄　赤井治三郎
石原千太郎　木村　隆次　大橋　鐵吉
田村　辨　横山久太郎　内藤　戊申
森　六郎　高倍權太郎　高倍　ふさ
山田　弘通　高島　浩　小野　鈴藏
岩田清次郎　金關　丈夫　松浦　巖
池田佐一郎　前中　友輔　大島　徹水
中村　直勝　藤谷　幸二　水口　雅彦
大竹　穆　上田　秋男　小酒井儀三
（以上廿七名）

図２　小酒井儀三「第七十二回史蹟踏査會概況」『歴史と地理』17/1（星野書店）1926 年 1 月。金関丈夫と小野鈴蔵の名前がある。



昭和九年
民藝品展覽會目錄
京都民藝同好會



第三圖　石製火鉢



第三　石製火鉢　金關丈夫　蔵

図３　京都民藝同好会『昭和九年 民藝品展覧会目録』。金関は石製火鉢を出品。



図 4　陳列館

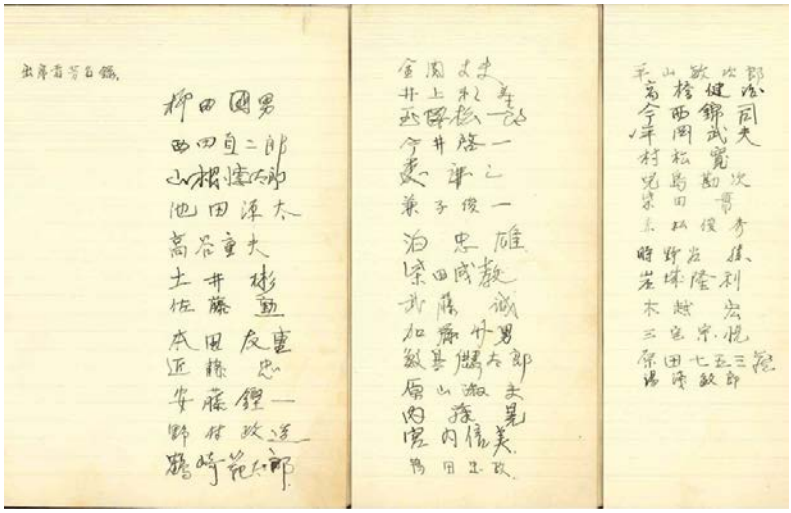


図 5　出席者芳名録（昭和 9（1934）年 5 月 27 日、楽友会館）。柳田国男、金関丈夫の名が記される。

川平朝申宛書簡からみる金関丈夫の沖縄研究

泉水英計

はじめに

柳田国男を研究代表者とする共同研究「南島文化の綜合調査研究」は、戦後における日本人研究者による沖縄調査の本格的再開を画するものであった。その嚆矢となったのが、1954 年 3 月に金関丈夫が率いた調査隊であったことはよく知られている。この時期の金関の沖縄への関心は、台湾あるいはフィリピンから日本へと北上した文化を跡づけることにあった。そのような関心の背景には、戦後も 1949 年夏まで続いた台湾での研究活動がもたらした学術的な知見があった。さらに、そのような関心をともに追究した人々にも台湾での研究活動を通して得た知己が目立つ。その筆頭が、台北での留用生活をともにし、引き揚げ後も南西諸島で数々の共同研究を組んだ国分直一であろう。一方、台湾時代の知己で沖縄に戻り、金関の沖縄研究に協力した一人が川平朝申であった。本稿は、金関が川平に送った書簡から、戦後の金関の沖縄研究について、台湾で形成された人的ネットワークが戦後沖縄で再接続されていく過程、渡航制限や郵便事情といった米国施政権下沖縄の政治的・制度的条件のもとで研究がいかに進められたか、そのなかで川平のような研究協力者と金関はどのような関係を結び、何を得ていたのかを明らかにしたい。対象とするのは、那覇市歴史博物館所蔵の金関書簡群であり、そのうちの 1950 年から 1960 年までの間に交わされた書簡を検討する。

川平朝申宛金関書簡

川平朝申は戦後沖縄にラジオ放送を復活させた人物として知られる。中学時代に台湾に渡り、苦学しつつ文学･芸術活動に従事し、台北放送局の番組制作にも関与した。その後、聴講生として移川子之蔵から文化人類学を学び､台湾総督府臨時情報部に勤務した｡また、須藤利一とともに雑誌『南島』を創刊し、台北に沖縄文化研究の拠点を築いた。戦後は沖縄同郷会連合会の幹部として、台湾に取り残された沖縄人の救済に尽力し、引き揚げ後は沖縄民政府および米軍軍政府において文化行政官として働いた。ラジオ放送局の創設は、こうした業務の延長線上に位置づけられる。

台北における沖縄文化研究を通じて、金関は川平と知己の関係にあった（「わが半生の記（4)」『沖縄春秋』第 9 号、1974 年)。さらに、朝申本人のみならず、その妻（「わが半生の記（8)」『沖縄春秋』第 13 号、1974 年）や、川平宛書簡の記述からは、朝申の弟や父親とも面識があったことがうかがえる。

那覇市歴史博物館が所蔵する「川平家資料」のうち、フォルダ「書簡 11」（資料コード 100000559）には、金関丈夫が差出人とされる書簡および葉書あわせて 45 通が含まれている。本稿では、このうち後段に文面を掲げた 18 通を対象とする。対象期間は、金関が台湾での留用を解かれて引き揚げ、九州大学に就職した 1950 年から、九州大学を定年退職し鳥取大学に移る 1960 年までの 10 年間である。この間、金関は差出人住所として九州大学医学部解剖学教室を用いているが､「日本福岡市博多局内九大医学部解剖学」(1951 年 1 月 26 日付書簡）のように、国際郵便を意識して国名まで記す例もみられる。そこには、当時

の沖縄の国際的地位をめぐる金関の躊躇が反映されているとかんがえられる。

一方、宛先人住所は、沖縄あるいは沖縄本島で書き出され、現在の那覇市三原にあった川平宅が用いられている。1950 年には島尻郡真和志村三原区であったが、1953 年に真和志村が市に昇格、57 年末に真和志市は那覇市に編入合併された。自治体再編のために金関の地名表記は少々混乱がある。

1950 年 7 月 2 日付書簡の冒頭では、台湾の金関から川平へ送られた書信がすべて不着であった可能性が指摘されている。実際、川平家資料には、これ以前に送られた金関書簡は含まれていない。一方、1947 年 7 月 4 日以降、川平から台湾の金関に送られた葉書の存在は確認できる（『回覧雑誌』）。さらに、1951 年 1 月 25 日付書簡によれば、1950 年 8 月に金関が福岡から川平宛に発送した書簡も不着であったという。

川平は 1948 年より米国軍政府情報部の職員であり、翌 1949 年に軍政府放送局（AKAR）が発足すると放送部長に就任した。このような身分を踏まえると、書簡不着の背景として、米軍による郵便検閲の可能性を含めた検討も必要であろう。なお、1952 年 4 月 22 日付および翌 1953 年 7 月 21 日付の金関書簡はいずれも宛先を「放送局」としているが、これは軍政府放送局ではない。1952 年 2 月に軍政府放送局が発展的に解消され、新たに設立された民間の琉球放送局（KSAR）を指す。

台湾人脈の再開

1950 年 7 月 2 日付書簡には、川平と共通する友人・知人への言及がみられる。以後の書簡でも繰り返し言及されるのは、「南風原」と「当山」の両者である。

「南風原先生」とは南風原朝保を指す。南風原は沖縄医生教習所および私立日本医科専門学校で学び、医学開業試験に合格して医師免許を取得した。1919 年に台湾に渡り、台北市児玉町にて小児科・内科医院を開業した。1936 年には「血液型ヨリ観タル沖縄県人」を『台湾医学会雑誌』（第 35 巻、1936 年）に発表している。孫の与那原恵は、「琉球人の人類学的研究」で学位を取得した金関と南風原の間に医学研究上の関係があった可能性を指摘している（与那原『美麗島まで』筑摩書房、2010 年）。金関と南風原はまた、骨董趣味を介した友人関係にもあった。南風原は在台湾沖縄人社会の要人であり、川平家との付き合いもあった。引き揚げの時期には、南風原病院に沖縄同郷会連合会の拠点が置かれた。引き揚げ後も南風原は、那覇医師会長を務めるなど、南風原は沖縄社会で指導的立場にあった。1954 年の調査行において那覇に滞在した金関は、南風原邸を宿舎としており、両者の昵懇ぶりがうかがえる（金関「南風原朝保博士を懐う」『琉球新報』1957 年 3 月 3 日、のち『琉球民俗誌』法政大学出版局、2008 年に再録）。

「当山君」とは当山堅一を指す。当山も医師であったが、金関との間には明確な師弟関係が存在した。台北医学専門学校を卒業後、宜蘭病院に勤務していた当山は、1942 年、昇進を目的として博士号取得を志し、熱帯医学研究所で消毒薬の研究に着手した。しかし、研究が進展しないうちに指導教官であった冨士貞吉が転任し、替わりに金関が当山の指導を引き受けた。金関は当山に「沖縄の人の生体学的研究」という課題を与えた。当山は父親が村長を務めていた恩納村に赴き、埠頭工事現場で生体測定を開始するが、沖合を航行する軍用船を目にし、国家存亡の秋に私益的研究に専心することへの忸怩たる思いから、研究を中断して台湾へ戻った。

終戦直後、当山は川平とともに沖縄同郷会連合会の中軸として、沖縄人集中営（帰還待機民間人の避難所）の運営に尽力した。その縁により川平は、台北に疎開していた当山の妹と結婚している。引き揚げ後の当山は、1951 年に設立された那覇保健所の所長となり、米軍側担当官ギルバート･ペスケラの指導のもと、戦後沖縄における結核対策事業の中軸を担った。1952 年 10 月から翌 1953 年 3 月にかけては、ペスケラの斡旋により、ハワイのレアヒ結核病院において研修を受けている（当山『傘寿を越えて』ニライ社、1993 年）。

金関は 1954 年の調査出張の合間に当山の研究指導をおこない、当山は戦争中に中断した生体測定を再開した。その成果をまとめた論文によって九州大学から学位を取得している（当山「沖縄本島国頭地方住民の生体学的研究」『人類学研究』第 6 巻第 4 号、1959 年）。

台湾人脈に連なるその他の人物として、「池田君」として言及されている池田敏雄がいる。池田は川平と同時期に総督府臨時情報部に勤務し、1941 年 7 月には金関とともに『民俗台湾』を創刊した。また、「鳳姿」とは元教え子の黄鳳姿のことであり、池田が台湾漢族の民俗研究に没入していく過程において影響を与えた人物であった。

一方、台湾人脈ではないが、以後の川平宛金関書簡で返し言及されるのが「親泊氏」すなわち親泊政博である。親泊は、戦前の琉球新報社を経て、戦時期の新聞統合による『沖縄新報』で取締役を務めたジャーナリストであった。出張中の福岡で終戦を迎えてそのまま残り、1946 年より沖縄人本土疎開者向けのタブロイド紙『沖縄新民報』発行した。1953 年に沖縄に戻り、琉球新報社長に就いた。金関は、親泊を介して『琉球新報』にしばしば投書している。

沖縄再訪の希求とその実現

金関は、引き揚げ後早々に沖縄再訪への希望を表明している。王陵「浦添ようどれ」の調査報道に接しては「飛んでゆき度い」（1950 年 7 月 2 日付書簡）と記し、首里金城町の石畳の写真を目にして「望郷の想ひ」（1951 年 3 月 17 日付書簡）を募らせたという。しかし、戦後の金関が希求したのは、1929 年の訪問地を再訪することではなかった。

金関は、「台湾で戦後四年間残留して考古学の仕事をもやり、どうしても沖縄南部の調査が必要に感ぜられて」（1950 年 7 月 2 日付書簡）と述べているように、台湾における戦後の考古学調査の成果を踏まえ、台湾と地理的に隣接する八重山諸島での調査を構想していた。浦添ようどれの石棺彫刻について川平からの照会には協力する姿勢を示しつつも、「交通の便が復活しましたら私は是非南の離島の方へゆき度い」（1951 年 1 月 25 日付書簡）と述べ、調査地の志向に揺らぎはなかった。

1951 年 1 月 25 日付書簡において、金関が新設の「沖縄大学」［1950 年 5 月開学の琉球大学を指す］での出張講義の可能性について川平に打診しているのも、教育活動への関心というよりは、調査入域の制限を回避するための現実的な方策を模索した結果と理解できよう。

翌年には沖縄再訪の可能性が浮上したが、すぐに実現することはなかった。1952 年 4 月 22 日付書簡には「柳田先生の沖縄研究団」への言及があり、金関自身と国分直一が人類学考古学を担当する予定であることが記されている。調査出張が「明年中」に予定されているとの記述からすれば、この書簡は 1953 年に送られたものと解するのが、1954 年の沖縄調査と整合性が取れる。しかし、封書の消印は「27.4.22」すなわち昭和 27 年（1952 年）

を示している。

この点については、同一書簡の末尾に言及されている「四月の学会で特別講演」が、1952年4月初旬に徳島大学で開催された日本解剖学会における特別講演「台湾在住民族を中心とした東亜諸民族の人類学的研究」(『解剖学雑誌』第27巻（総会号)、1952年）を指すと考えれば、書簡は1952年のものとみるのが妥当であろう。

柳田を研究代表者とする「南島文化の綜合的調査研究」は 1953 年に文部省科学研究費の交付を受けて実施されたとされるが、当初は前年 1952 年の開始が想定されていたようである。柳田が主宰する民俗学研究所では、1951年秋に沖縄研究室を設置して沖縄関係史料･文献の整理を進め、翌1952年には民族学協会と連携した現地調査を計画していた(「沖縄ニュース」『文化沖縄』第3巻第4号（通号23号)、1951年)。この事業は柳田の喜寿記念事業としても位置づけられており、講和条約の締結によって日本が翌年には外交的独立をひとまず確保できる見通しも立ったことも、計画推進の背景にあったと考えられる。また、沖縄では1952年4月1日に琉球政府が成立し、米国施政権下における恒久的な行政組織が整えられた時期でもあった。金関が楽観的な見通しを抱いたとしても不自然ではない。

しかし、外交･政治上の制約は依然として大きかった。翌1953年5月、雑誌『日本民俗学』創刊号に掲載された「南島研究の目途」において柳田は、「南島研究綜合調査の計画にも故障があって、二、三年この方のびのびになっている」と述べている。民俗学研究所専任研究員として同計画を担当し、のちに金関の調査隊にも参加した酒井卯作は、この一節を回想録で引用したうえで、「ここで故障というのは、いうまでもなく、米軍支配下の沖縄に自由に渡航できないという政治上の不自由さのことである」と説明している（酒井「琉球旅日記」(3)『法政大学沖縄文化研究所所報』第71号、2012年)。

「南島文化の綜合的調査研究」は 1952 年に金関隊以外の研究者が現地調査をおこなう見込みであったが、結局1年以上遅滞して1953年に開始され、初年度末に現地調査に向かった金関の率いる調査隊がその嚆矢となった。本土からの派遣されたメンバーは、金関（人類学)、国分直一（考古学)、酒井卯作（民俗学）に加え、金関の解剖学教室助教授であった永井昌文の計4人であった。

一行は3月8日の船で鹿児島を発ち、酒井を除くメンバーは5月3日の船で那覇から帰途に就いた。学期中の帰還となったため、金関が川平に礼状（1954年6月3日付書簡）をしたためたのは、その一月後のことであった。大学に戻った金関は多忙を極めたが、共通の知人である親泊政博が沖縄に帰ることを知り、あわてて筆を執り託送を依頼したのである。

この礼状には、「南島文化の綜合的調査研究」第二年度の現地調査についての言及も含まれている。そこでは国分直一が再び調査に参加する可能性に触れられているが、実際に現地調査に派遣されたのは馬淵東一であった。馬淵は台北帝国大学文政学部史学科を卒業後、同大学の土俗・人種学教室嘱託として『台湾高砂族系統所属の研究』（1935年）に貢献した台湾原住民研究者である。1950年前後から柳田国男の民俗学研究所に迎えられ、沖縄研究に着手するとともに、東南アジアを視野に入れた社会組織論を展開していった。1954年の沖縄出張は初めての沖縄調査であり、7月25日から9月21日にかけて主として宮古島に滞在している。「えらい男です」（1954年7月5日付書簡）という金関の高い評価は、戦

前期からの馬淵に対する観察に基づくものであろう。

この書簡で言及されている金関から琉球政府行政主席および文教局長に宛てた「推薦状」は馬淵が託送したに過ぎず、馬淵自身の調査とは無関係のものであった可能性が高い。馬淵を迎える川平は、放送局の運営方針をめぐる対立から同年 4 月 5 日付で放送局長を辞職し、無職の状態にあった。最終的には 10 月 15 日付で、義兄の当山堅一が関与する琉球結核予防会の事務局長に就任している。「推薦状」は、この間の就職活動に用いられたものであろう。あるいは、文化財専門審議会に関連する推薦であった可能性も考えられる。1954 年 6 月 28 日に琉球文化財保護法が公布・施行され、10 月 12 日には文化財保護委員会およびその諮問機関である文化財専門審議会が組織された（1956 年版『文化財要覧』）。もっとも、川平の名が文化財専門審議会委員として確認できるのは、1959 年版『文化財要覧』（6 月 1 日現在）からである。

「南島文化の綜合的調査研究」終了後も、国分は沖縄での調査行を継続して行った。「国分君来訪、いろいろ当地のご様子拝聴しました」（1956 年 5 月 29 日付書簡）という書簡は、沖縄本島米須貝塚および久高島シマシーヤーマ貝塚の調査から帰った国分が、川平から託された品を携えて金関を訪ねたことを伝えている。この際、国分は川平を取り巻く状況についても金関に語っている。軍用地収用問題をめぐって沖縄社会が緊張を高めていた時期であり、6 月 10 日に米国議会調査団の勧告が発表されると、「島ぐるみ闘争」と呼ばれる大衆運動が急速に過熱した。しかし、そのような状況下にあっても、統一的な行動がとられていなかった沖縄文化人を金関はいさめている。

この時期の金関は国分と組んで種子島の発掘調査を実施している。1958 年 6 月 20 日付書簡の追伸に記された発掘は、前年から両者が着手していたものであった（「呉志の亶洲と種子島」『毎日新聞』1959 年 7 月 27 日、のち『琉球民族誌』に再録）。

つづく 1959 年 3 月 7 日付書簡にみえる「アメリカ人の発掘記」とは、同年に野国貝塚を試掘した、ニューヨーク自然史博物館の Junius B. Bird および Gordon F. Ekholm による調査を指すと考えられる。金関は彼らの発掘方法を批判しつつも、そこに強い対抗意識と嫉妬を露わにしている。この感情は、彼らの調査を紹介した多和田真淳の記事によって、さらに刺激されたようである（1959 年 4 月 11 日付書簡）。

多和田は植物学教師として出発しながら、琉球列島の貝塚編年を確立した考古学者であり、1954 年の「南島文化の綜合的調査研究」に現地から参加した研究者でもあった。金関や国分とも面識はあったが、上記の金関書簡からは、多和田と日本人学者とのあいだに一定の距離が存在していたことがうかがえる。出土品をめぐる学術的論争（「野国貝塚発見の開元通宝について」『琉球新報』1959 年 3 月 29・30 日、のち『琉球民族誌』に再録）とあわせて、こうした確執の存在も、戦後における金関の沖縄研究を考察するうえで考慮すべき要素であろう。

情報提供者としての川平

金関が戦後の沖縄研究を推進するにあたり、川平の協力は大きな助けとなった。川平宛金関書簡から明らかになる協力の一つの形態は、川平から進呈される書籍である。金関書簡を注意深く読むと、ガムやココア、コーヒーといった嗜好品と同様に書籍も、郵送ではなく託送されたことがわかる。具体的なタイトルが判明する川平の進呈本として、1952 年

4 月 22 日付書簡にみえる「ワンルーンの『美術』」は Hendrik Willem Van Loon の *The Arts (with musical illustrations by Grace Castagnetta)*（Simon & Schuster, 1937）であろう。金関が言及している訳書は、玉城肇訳による邦題『芸術の歴史』（全 3 冊、鮎書房、1943-44 年）とおもわれる。そのほか洋書では、戦後沖縄を舞台にした Vern J. Sneider の喜劇小説 *The Tea House of August Moon*（Putnam, 1951）が送られている（1954 年 7 月 5 日付書簡）。このときすでに米国の舞台で好評を博し、1956 年にはマーロン・ブランド主演で映画化されることになる。*National Geographic Magazine* の進呈と合わせてみると、米国施政権下の那覇の方が福岡よりも洋書の入手が容易なことがあったようである。

1956 年 5 月 29 日付書簡にみえる「ケアの本」とは、George H. Kerr による琉球史を指す。米軍の委託事業として作成された、全米調査評議会（NRC）太平洋学術部会の報告書を、沖縄の学校副読本用に和訳した『琉球の歴史』が、1956 年 1 月に琉球列島米穀民政府（USCAR）から刊行されていた。戦前、台北高等商業学校で英語講師を務めていた Kerr は、当時から金関と面識があり、終戦直後の台北では南風原らも加わった骨董趣味の仲間でもあった。金関は、川平と南風原から『琉球の歴史』を進呈されたことを記している（金関「カーの思い出」『沖縄タイムス』1956 年 9 月 15・16 日、のち『琉球民族誌』に再録）。なお、一般に流布している Kerr の *Okinawa: The History of an Island People*（Charles E. Tuttle, 1958）は、この報告書を増補改訂したものである。

和書については、川平は琉球史料研究会の出版物を金関に多く進呈している。琉球史料研究会は 1955 年に設立され、機関誌『沖縄』では論考に加えて稀覯書や古文書の復刻を掲載した。会長は山田有幹、副会長に城間朝教、相談役に山里永吉や仲宗根政善が就任していた。城間は戦前の沖縄県立図書館最後の館長である。郷土資料を含む県立図書館の蔵書は戦災によって失われていたため、琉球史研究の古典的文献を閲覧する手段が切実に求められていた。沖縄で改めて刊行された以下のような琉球史研究資料は、日本本土では容易に入手できなかったと考えられる。

1959 年 1 月 6 日付書簡にみえる「琉球国由来記」は、王府が編纂した最古の地誌であり、1957 年から 1961 年にかけて全 8 冊で刊行された。1959 年 3 月 7 日付書簡にみえる「大島筆記」は、1762 年に台風によって土佐国大島に漂着した琉球国櫂船の取調記録で、上下巻および付録からなる全 3 冊であり、琉球史料研究会が 1958 年から 1959 年にかけて順次刊行した。下巻を先に進呈された金関は、川平に上巻を所望しており、最終的には全冊が進呈されたようである（1959 年 4 月 11 日付書簡）。1959 年 12 月 10 日付書簡にみえる「羽地按司仕置書」は、慶長の役後に琉球国摂政を務めた羽地朝秀（向象賢）の布達をまとめたもので、1959 年 12 月に刊行された。同じ書簡にみえる「教条複製本」とは、18 世紀に三司官を務めた蔡温が発布した領民の生活規範に関する法令集で、1959 年 8 月に『教條』として刊行されたものである。また、1960 年 3 月 9 日付書簡にみえる「『独物語』復刻本」は、蔡温による政治随筆に口語訳を付した『独物語（口語訳附）』として、1960 年 2 月に琉球史料研究会から刊行された。

このほか、1959 年 3 月 7 日付書簡にみえる『今日の琉球』は、USCAR が刊行していたグラフ形式の広報誌であり、日本本土での流通は限定的であったと考えられる。

やや異例なのが、1959 年 7 月 3 日付書簡にみえる賀川光夫『爬竜のろ』（三恵印刷、1959 年）である。賀川は別府大学の考古学者で、本書は大分で刊行されたものであるが、沖縄

の川平から福岡の金関へと進呈されている。

沖縄への送金が困難であったため、進呈本の代金を支払えなかった金関は、返礼、あるいは「見返物資」(1959 年 3 月 7 日付書簡）として書籍を進呈することを繰り返し約束している。しかし、実際に確認できるのは、フレイザー『金枝篇』の進呈（1959 年 1 月 6 日付書簡）のみである。

金関の沖縄研究に対する川平の協力は、沖縄の民俗について直接の情報提供という形態を取ることもあった。とりわけ、沖縄への調査行が容易ではなかった時代に、金関の質問の学術的意図を理解し、しかも沖縄全域に情報網を持つ川平のような存在は貴重であった。

質問の具体的な内容は、額で受ける背負い縄（ティール）の呼称、使用法および写真画像（1953 年 7 月 21 日付書簡)、琉球花織とその与那国島、読谷、与論島への分布について（1958 年 6 月 20 日付書簡）などがみえる。ときには、正月綱引きおよび爬竜船における双分組織についての質問（1959 年 1 月 6 日付書簡）に対する川平の応答を受けた金関が、双分制の問題についてさらに質問を重ねる（1959 年 3 月 16 日付書簡）といった書信の往復もあった。ここで金関は、国分から伝え聞いた山口の離島の事例を川平に紹介し、論考は外婚的双分社会に照準を定めていることを告げ、その存在を暗示するような沖縄の事例の有無について尋ねている。

金関が設定した問題に川平が沖縄の事例を提供するというこのような関係は、中央の研究者と地方のインフォーマントという関係の典型ともいえよう。上記の書簡（1959 年 3 月 16 日付書簡）の後段で金関は、前後の脈絡なく、新郎が新婦に接触することの禁忌やクーヴァード（妊娠共感症候群）の事例についての情報を川平に求めている。クーヴァードのシーンを含むイタリア映画として金関が言及されているのは「太陽の帝国（L'Impero del Sole)」(監督エリンコ･グラースとマリオ･クラヴェーリ、1956 年制作）である。

むすびにかえて

九州大学から川平に送られた最後の書簡（1960 年 3 月 9 日付）において、金関は「南島文化の綜合的調査研究」における 1954 年の波照間島調査の報告書（金関･国分･多和田･永井『波照間島下田原貝塚の発掘調査』水産大学校、1964 年）の原稿がほぼ完成したことを伝えている。新学期より鳥取大学に勤務するため近く松江へ転居し、新年度中には久しぶりに台湾を再訪し、当山堅一の招待により妻を伴って沖縄にも立ち寄る予定であるという。1960 年は、戦後の金関の研究生活の大きな節目となった。

川平家資料には、その後も金関の最晩年に至るまでの書簡が含まれている。これらを丹念に読み解くことで、金関の沖縄研究のさらなる展開を追うことも可能であろう。しかしまずは、1954 年の調査行と、それと前後する金関の研究活動について、関連する他の一次資料と突き合わせて再検討することにより、九州大学時代の金関の沖縄研究をより立体的に描き出す作業を進めたい。その際、国立台湾大学に所蔵されている国分直一の書簡およびフィールドノートは、最優先で取り組むべき資料であろう。さらに、酒井卯作や多和田真淳といった共同研究者の記録、金関宛の川平書簡、さらには金関による沖縄地方紙への投稿などについても、今後継続的に調査を進めたい。本稿は、そのような作業に向けた一つの手がかりとして位置づけておきたい。

川平朝申宛て金関丈夫書簡（那覇市歴史博物館所蔵）

1950 年 7 月 2 日（福岡市九大解剖学教室より沖縄 那覇市外真和志村三原区二班）航空便

六月九日附お手紙うれしく拝見いたしました　台湾滞在中も度々いただきました　台湾ではそのたびお返事差出しましたが不着の様子でした　昨年八月末帰国して今年三月　当大学へ赴任しました　前後約一ヶ年になり　まだ心おちつかず御無沙汰を重ねておりました何卒お許し下さい　その後あなたはお元気に相変わらず朗らかにお仕事をなさっていられる様子　何より嬉しく存じます　実は先日　南風原先生より始めてお便りあり　尚家廟の人骨調査のことで問合せがありましたのに返事をかき　その折りにあなたにも同時に書くつもりでしたが　あなたにはお詫びしなければならぬこと沢山あり　筆をとるのに抵抗が多くて遅れた始末です　この廟の調査のことは南風原先生の送ってくれた新聞の記事にて簡単に承知しました　私も飛んでゆき度いところですが思ふにまかせません　どうぞよい成績があがるようにとお祈りいたします　いつぞやお送り下さいました石棺の写真もまだ保存しております　時代は中国の彫刻史をしらべて比較しても辺陬にはより永く古式がのこることは今日の沖縄の大和言葉でもわかる通りですから　あまりあてになりません　沖縄での美術工芸史の編年をまづうち立てねばなりますまい　これは今となってはなかなか困難或は不可能かも知れません　しかし　とにかくあの写真を京都か東京の専門家に見せて何とか結論をさがしてみませう
当地では親泊氏から親切にしていただきご馳走にもなりました　その後　失礼していますが　近くおたづねしようと考へてをります　崎山朝浩君も大変親切にしてくれます　彼は今　山口県の某病院につとめています　私は台湾で戦後四年残留して考古学上の仕事をもやり　どうしても沖縄南部の調査が必要に感ぜられて　いつかは行って見たいと念願しています　世の中が直れば　いつかはその希望も達せられることでせう　今は福岡市に住宅なきため教室で自炊生活　妻は京都に子供と一緒にをります　そのうちまたおたよりいたします　どうぞお大切にがんばって下さい　池田君、松江市島根新聞社学芸部に記者として奮闘しています　鳳姿と結婚し　この秋には子供も出来るも様です
先は右まで　乍末筆御一同様によろしく　当山君にもおついでの折どうぞよろしく
七月二日／金関丈夫／川平朝申兄

1951 年 1 月 25 日(日本 福岡市博多局内九大医学部解剖学より沖縄島真和志村三原二班)

親泊さんよりお手紙とご恵与のガム難有く拝受いたしました　昨年八月頃浦添の発掘の御報ありました折すぐお返事あげましたが御受取りでない様子です　台湾からも（内地に帰りましてからも）度々手紙さしあげましたが不思議とそれについて御一言もお返しがないので皆未着のことと思っています　昨年八月のは同時に南風原君へも出し　それには返事がありました
さて　その後いよいよお元気の段　何よりに存じます　いろいろとやり甲斐あるお仕事の

多いこととお祝い申し上げます　どうぞ力一ぱいお働き下さい　私も細々ながら落ちついて仕事を進めておりますから何卒御安心下さい
ユードレの石棺の彫刻については　その道の専門家によくきいてお返事申しませう　交通の便が復活しましたら私は是非南の離島の方へゆき度いと思います　台湾と八重山との関係（考古学的）は是非調査したいと存じます
沖縄大学も御発足のことと存じます　医学部も出来ましたか　解剖の貸義（出張講義）に読んで下さるような機会はありませんかしら　ユードレの人骨も一度よくしらべたいと存じます　南風原たちはようやりますまい
こちらでは親泊さんや崎山朝浩君が親切にしてくれます　当山堅君は元気でしょうね　どうぞよろしくお伝へ下さい　あなたはお子供さんはまだですか　奥様はじめ御両親　御令弟様によろしくお伝え下さい　只今とりいそぎこの手紙かきますが　いづれおちついてゆっくり書きませう
どうぞ皆様お大切に　先は御礼迄
一月二十五日／金関丈夫／朝申兄

1951 年 3 月 17 日（福岡市博多局管内九大医学部解剖学教室より沖縄真和志三原二班）

本日菊池係長より書物一冊ならびに御懇書拝受いたしました　いつもながらのご好意あり難く御礼申上げます　ことにご一家おそろひのお写真うれしく拝見いたしました　御父君のお姿の見えないのは残念でしたが　その代り第三代のお元気そうなお顔を拝し大変うれしく存じました
其後多忙のままに親泊さんにはまだ拝眉いたしませぬが　そのうちお目にかかり御様子承り度く存じます
お写真のうち首里市金城町の旧態を見てなつかしさにたえませんでした　いつまた皆様にお目にかかり旧山河を見ることが出来るかと　いつも望郷の想ひをもっています
只今日本の学界もアメリカ流の能率主義でただただいそがしく　ゆっくりとする暇がありません　しかし　それでも私は人一倍ゆっくりして無駄がきの随筆など時々かいています
御一同様の御健康をいのり　この度はそれで筆を擱きます　当方一同元気にしています
三月十七日／金関丈夫／川平兄

1952 年 4 月 22 日（福岡市九大医学部解剖学教室から沖縄那覇市放送局）

其後　申わけない御無沙汰いたしてをりますが　益々御元気のことと存じます　さて去日学生某君小生不在中に　昨年貴兄より托されたとの伝言と共にワンルーンの「美術」「ナショナルゼオグラフィックマガジン」各一冊教室において行かれました　貴兄の御署名の日附は昨年五月となってをりますので　貴兄には定めし気をもまれたことと存じます　とにかく正に拝受いたしましたから御安心下さい　いつもながらのご芳志には　ただただ感謝の他はありません　ことにワンルーンは日本訳書でその一部を読み　残部未出版のため久しく渇仰いたしてをったものです　まことにありがとう存じました
次に柳田先生の沖縄研究団のことは来月末　審議パスの予定にて　小生と国分直一君とが

人類学考古学方面を受けもち　多分明年中に八重山･宮古等へ出張することになると存じます　今年中にも他の諸君がまいりますから　その折りには何とぞよろしくお願ひいたします
先日　柳田先生に東京にてお目にかかった折　「川平朝申君は川平朝令氏の息子さんだったか甥だったか　私はよくお名前を知っている」と云っていられました
私はこの四月の学会で特別講演をして　ひきつづき旅行し一昨日帰宅したばかりで物事に雑務に追われ多忙ですから　今日はこれで筆をおきます　いろいろと申上げたいことありますが　次便にゆづります
乍末筆　皆様に何卒よろしくおつたへ下さい　先は右御礼迄
四月二十二日／金関丈夫／川平兄

1953 年 7 月 21 日（福岡市九大医学部解剖学教室から沖縄本島那覇市那覇放送局）

大変御無沙汰しました　お許しください　皆様お変りありませんか　お子たち　おおきくおなりのことと存じます　私の方も一同元気です　上二人はどうやら自分で下宿代をかせぐようになり助かります（二人とも京大つとめ）
私と国分さんとは明年二月波照間島調査のためそちらへまいります　そのさいはどうぞよろしくお願いいたします　柳田さんの沖縄調査団の先遣隊としてまいります　三年間ひきつづきやる予定です
さて　その前に大変御めんどうながらお願ひがあります　本島国頭地方で今でもやつていると思ひますが　女が縄を頭にかけて荷物を運ぶ風習がありますね　あの写真を何とかしてお送り下さいませんか　そして　その運び方や道具の名称をおしらせ下さい　この秋それについて報告したいと思ひますので　夏休中に材料をまとめたいと存じます　お手数ながらどうぞよろしくお願いします
この地の水害は相当のものでしたが私の方は何のさわりもあませんでしたからご安心下さい
御令弟皆様にどうぞよろしく　当山君はハワイから帰りましたか
どうぞ皆様お大切に　先は右お願いまで
七月二一日／金関丈夫／川平兄
［追伸］右の負ひ方のひろがりはどうなっていませうか　国頭の名護あたりまででせうか

（1954 年）6 月 3 日（郵便封筒欠、親泊政博託送か）

滞琉中は一方ならぬ御厚情　御礼の申しようもありません　いただきましたおみやげも毎日珍重していただいています　御厚志のほど　ありがたくありがたく御礼申上げます　帰学以後　東京で報告講演　又　京都で講演いたし　その間　解剖学会へ出席いたしなどして時日を費やし　御礼状つい延引いたしました　お許しください　親泊氏近々御帰琉とのこと　とり急ぎ乱筆ながら御礼申上げる次第です　御母堂　御奥様にどうぞよろしくおつたへ下さい　国分君も元気にいたしております　今年度の第二回調査には私はどうやらゆけないようです　国分君は多分ゆけることと存じます

別に書物二冊お受けとり下さい　そのうちいろいろとお送りしませう
先はとりいそぎ右お礼まで　草々
六月三日／金関丈夫／川平兄

（1954 年）7 月 5 日（封筒欠、馬淵東一託送か）

御懇書ありがたく拝見いたしました　比嘉首席及び文教局長宛推薦状同封の如くにしたためましたから　御一覧の上　お差し支えなくば何卒御利用下さい　但し私の推薦が果たして役に立ちますかどうですか　とにかく無いよりはましと云う程度の効果かと存じます
小生こんどはまいりませんが馬渕【ママ】君のこと何卒よろしくお願いいたします　彼は呑む方ですから南風原の方へ相手させておいたらいいでせう　しかし　南方民族学では今のところ日本では唯一人者で　えらい男です
御母堂様　御奥様にどうぞよろしく
七月五日／金関丈夫／川平兄

追伸　先般いただきました The Tea-house of the August Moon　先日一読いたしました大変面白いもので楽しむことが出来ました　厚く御礼申上げます　ひまが出来たら読後感などしたため　当地の新聞紙上に投じたいと存じています

１９５６年 5 月 29 日（福岡市堅粕九州大学医学部解剖学教室より沖縄本島真和志市三原区三班）

本日国分君来訪　いろいろと当地のご様子拝聴しました
あなたよりの数々の御ことつけものまことに難有く　いつもの御好意　身にしみてうれしく存じました　あつくお礼申上げます
ケアの本はたのしみにして拝読いたします　小生　只今　家内　京都におり一人くらし（あと数日だけですが）です　それで　コーヒー　ココア　大へんありがたいです　重ねて御厚礼申上げます
国分君の話でいろいろと狭い土地で皆々自我を主張してまさつをおこしているのがまことに残念に思います　文化人はお互いの間を清算して　一つになって当たるべき目標があると思います　政治運動を直接するというのではなく　一つになって指導の中心にドカリと座を占め　その発言を相当に重んぜさせなければならないのではないかと思います　兵隊が村の女を射殺した場合　一人の文化人がそれへの憤りを筆にしないということは　なさけないと思います　それはやはりお互いに団結していないと筆はとれないことと思います　そうしたユニオン運動をおこすべきだと思います
不正に対して最も敏感なのが文化人だと思います　古文化の尊重ということも現代の不正に対する反省の意味があって理由がなり立つわけではないでせうか
国分君の話をきいているうちにこんな感想にとりつかれ感慨にふけりました　ご健闘をいのります
先は右　御厚礼まで

乍末筆　御一同様によろしく
五月二九日／金関丈夫／川平朝申兄

1958 年 6 月 20 日（福岡市堅粕九州大学医学部解剖学教室より沖縄本島那覇市真和志区三原区三班）

早速ご教示ありがとう存じました　お蔭で大変よくわかりました　しかし　リウキウ花織の起源についてはどうもまだわからないことが多いようです　与論の同趣の織物は祭のときに使用しますので古いものと考える他ありません　中途で南洋方面から習得した技法とはどうも考えにくいのですが　それが与那国　読谷山　与論と　やや辺鄙なところにのみのこっているというのもおかしい話で　やはり古くから土着していた技法ではないかと考えられますが　どうでしょうか　とにかくご教示に従いよくよく考えて見ることにいたしましょう　ご多用中ありがとう存じました
六月二六日／金関丈夫／川平兄
皆様によろしく
この夏は種子島の発掘やります

1959 年 1 月 6 日（福岡市堅粕九州大学医学部解剖学教室より沖縄本島那覇市真和志三原区三班）

琉球国由来記復刻本一　二　三　四　四冊ありがたく拝受いたしました　ご好意深謝いたします
毎々御負担をかけましては恐縮ですから（ご送金も不可能ですので）こちらから見はからいで本など　これからぼつぼつお送りします　その第１回として　とりあえず　フレーザーの金枝篇の訳本　多年手許においたものですが　近頃原著入手しましたのでお送りします（民俗学）必読の名著です　そのうちまた何か入手してお送りいたします
近頃　私の知りたいと思うことがあります　それは当地の正月行事の「つな曳き」ですがその雌雄の綱は各きまった団体が毎年きまって作るのかどうか　その団体間にはどういう関係があるか　そのつな曳きについてどうしてそれをやるかという思想があるか　それとペーロン船の競漕との関係　雌雄のつな方のどちらかできまって勝つことになっているかどうか　そのあとで乱婚の如きことを暗示させるような行事はないかなど　折にふれ御採集おき下さいませんか　日本でも民俗学の方で双系社会制度が問題になってまいりつつあります　その資料として知っておき度いのです
どうぞよろしくお願いいたします　どうもありがとう存じました
一月六日／金関丈夫／川平朝申兄

1959 年 3 月 7 日（福岡市堅粕九州大学医学部解剖学教室より沖縄本島那覇市真和志三原区三組）

本日　大島筆記下巻と今日の琉球誌ありがたく拝受いたしました　いつも乍ら御好意まこ

とに難有う存じます　大島筆記上巻はまだ見ておりません　お序での折お送り下さると大変ありがたいです　下巻　早速よみましたが　非常におもしろいものでよろこんでいます　見返物資（？）お送りすること怠っていますが　そのうちボチボチ義務を果たします
三月七日／金関丈夫／川平兄
近ごろの琉球新聞にアメリカ人の発掘記　のっていますが　金もちのひま人のやりそうなやり方で　うらやましくもあり　バカらしくも思って　読んでいます

1959 年 3 月 16 日（福岡市堅粕九州大学医学部解剖学教室より沖縄本島那覇市真和志三原区三班）

綱曳のことくわしく御報告まことにありがとう存じました　御多忙中すみませんでした　実は国分さんの最近の調査で山口県蓋井【フタオイ】島という小さい島に今も　松の木と椎の木をトーテム樹として　それぞれ正月に門松門椎をたてる二つのクランが明らかに存在しており　それぞれ松山と椎山を男女神（山の神）として崇めており　祭りは両クランが共同してやっています　これは世界各地(ことにインドネシア／メラネシア)にあり　日本古代にもあったと思われる（イザナギ／イザナミ　アマミキヨ／シネリキヨ）双分制社会制度の名残であろうと考えられるわけです　つな曳きもこうした双分制を考えてはじめて理会される行事で　男女どちらか一方が必ず勝つことになっており　それが順当に勝てば　その年は豊作だという年占いでもありますが　元来は両クランの対立と和合という意が深く　かごしまの田舎では最近まで綱曳のあとで（女方がまけることになっている）女共を追い伏せて野合する風習があったようです　この男女和合ということも年の収穫の祈念になるわけですが　その源は双分制における（外婚的双分制）一つのクラン間の和合の行事に関連があったようです　そのようなことから　現今のこっている沖縄の綱曳の行事の底にある何か古いものの痕跡が深いところに残存してはいないかということを知り度いわけです　明人渡来以後　沖縄では姓のクランが表面に出てしまいましたが　姓以外の何か部落中心のクランのようなものはないでしょうか　海辺の漁夫部落と山村奥地の農民部落との間に対立のような気分はないでしょうか　というようなことも問題解決に役立つかもしれません
それから新しいテーマとして　花嫁が山に逃げこんで花婿がさがしにゆくという風習ですが　私は「花」はあて字で「ハナ」「ハネ」「カネ」は一種のタブーを表すことばと思います　鉄漿【カネ】はそのタブーを表示する風習で　結婚後いく日かは新夫は新婦に触れてはならなかったのだと思います　そこで　沖縄の花よめさがしの風習が意味をもってくるのですが　その時の嫁さんに何か特殊の名称はありませんでしょうか　それに関連して手に入墨をしたとき　男がその女にふれてはいけないというタブーはありませんか
第三に「クバード」の問題ですが　妻の出産のときに男が産婦同様に苦しむ　同時にいろいろの禁忌が男に課せられる　たべもの　労働　すべて○○○を男の方に禁じる　つまり妻の産のとき　夫の方に何々してはいけないというタブーが何かありませんか　日本古代にもあったろうと私は考えているのですが　これも　アメリカ土人　南洋　印度　ヨーロッパ　広く存在している風習です　この前のイタリヤの映画の「太陽の帝国」という南米の記録映画にもその場面がありましたのはごらんでしたかと思います

いずれもいそぎはいたしません　問題を心にもっていて折々に気をつけておいて下さいお願いいたします
学会前で多忙ですので乱筆これで失礼いたします
どうもありがとう存じました
三月十六日／金関丈夫／川平兄

1959 年 4 月 11 日（福岡市堅粕九州大学医学部解剖学教室より沖縄本島那覇市三原区三組）

大島筆記付録一　琉球新報お送りいただきまことに難有く存じました　いつもながらのご好意ありがたく御礼申し上げます
多和田氏の一文　発現時の詳細　少しはわかり有益でした　しかし　食事のときふところから銭がおちたなどという想像はおかしいものです　もっと沢山あったはずというのは発掘法の不備を語っているようです　私のいうのは六枚でないと埋葬銭ではないというのではありません　もっと沢山副葬する例はいくらでもあります　多和田氏のいうように当時唐銭をもって中国へ行こうとしたものが落としたとすれば　それは日本の留学生でしょうが　それにしても唐銭持参は少々無理でしょう
折角の発見ですからもっともっとめんみつにしらべ考える必要があります　私は自説にこだわる気はありません　多和田氏は「一三三八年前のものなることを知った」と断言していますが　一三三八年前の最初の鋳造のときのものだという確証あるのでしょうか　その後たびたび鋳造されたことは私の書いた通りで　その或るものはいつの鋳造だとわかるものもありますが　わからないものもあるはずです　しかし　炉あとであったことがわかったのは幸いでした　炉あとなら埋葬ではないでしょう
私が少し皮肉なかき方したのは　日本考古学者はよく見つけなかったが　アメリカ人は（さすが　えらい）これらを見出したなどというバカなことを新聞に書いていたのを見て少しシャクにさわったからです
琉球を発掘しようというなら　良心的な学者なら　国分さんに先ず会ってものをきいてからにした方がいいのです　いろいろかきましたが　およみすてください　いずれ何か見かへりの本お送りします
どうぞお大切に
四月十一日／金関丈夫／朝申兄

1959 年 7 月 3 日（福岡市堅粕九州大学医学部解剖学教室より沖縄本島那覇市三原区三班）

お手紙　おしゃしん　賀川君の本　その他　ありがたく拝受しました　御好意あつく御礼申しあげます
賀川君　感激のあまり　とにかくあれだけのもの　一人で出したのはその点感心です　しかし　琉球にとって PR の役割をするだけで　学問には別に関係ありません　知識の程度はいいかげんですね　アニミズムをアミニズムなど平気で書いています　誤植でないとしたらこまったものです
親泊さんに円覚寺問題について小文送っておきました　もう紙上に発表されたかと存じま

すが　御批評おきかせ下さい　少々手おくれでの感がありますが　しかし　手おくれでなくても事実上には何の役にも立ちますまい　すれば手おくれでも　当事者の反省のためには多少は役に立つかもしれんと思って出したわけです　急に
暑くなりました　どうぞ皆様お大切に
七月三日／金関丈夫／川平兄

1959 年 12 月 10 日（福岡市九大医学部より沖縄本島那覇市真和志三原区三班）

先般来度々　貴文掲載雑誌お送りくだされ　まことにありがとう存じました　本日はまた羽地按司仕置書と教条複製本お送りいただき御好意あつく御礼申しあげます
私も何かいいもの見つけてお送り致し度く存じています
年末になりましたが　御一同様　よいクリスマスお迎いになりますよう心からおいのりいたします
とり敢えず右御礼にとどめます
一九五九年十二月十日／金関丈夫／川平兄

1960 年 3 月 9 日（福岡市九大医学部より那覇市三原区三班）

拝啓　其後ごぶさたいたしております　皆様お変わりないことと存じます
さて、この度は「独物語」復刻本お送りいただきまことに有りがとう存じました　毎度の御厚志御礼の申しようもありません
先日は当山堅一君よりもご親切なお手紙たびたびいただきました　この秋渡台の折（当山君のおすすめにより）その帰途錦地に寄り家内に沖縄を見せてやり度いと存じております　その折はまたまた御厄介になることと存じます　どうぞよろしくお願いいたします　御承知のように私もこの月で九大定年退職　あと二年間米子市の鳥取大学医学部につとめることにしました　四月上旬単身で住家見つかりしだい移転しようと思っています　山陰は私の旧居の地で　こんども松江に住むつもりです　あなたのお好きなラフカジオ･ハーンの遺蹟の地ですから　どうかこんどはお返しにおこしください
只今国分さんと二人で八重山調査の結果をまとめています　おそくなりましたが原稿はほぼ脱稿しました
末筆ながら御一同様の御健康と御平安をおいのりいたします　先は右御礼まで
金関丈夫／三月四日／川平朝申兄

End

金関丈夫の台湾時代と「渡来説」

坂野　徹

はじめに

筆者はこれまで、日本におけるフィールドワーク系の学問（人類学、考古学、民俗学、動物学など）の歴史研究を進めてきたが、そのなかでも大きな関心を占めていたのが人類学・考古学者による日本人起源論の系譜であった。本プロジェクトで取り上げる金関丈夫（1897-1983）は、一般に「渡来説」の提唱者として知られるが[1]、本報告で焦点を当てるのは、「渡来説」提唱以前の金関の自然人類学研究である。

金関丈夫の「本業」は、医学部に所属する解剖学・自然人類学である。しかし、彼の学問的関心は狭義の人類学・考古学にとどまらず、歴史学、民族・民俗学、言語・文献学、文学、芸術など多岐にわたり、その幅広さから「金関学」「昭和の南方熊楠」などと呼ばれることもある[2]。それゆえ本共同プロジェクトは文化人類学、民俗学、物質文化研究の専門家とともに組織したわけである。

以上をふまえ、本報告では1950年代に金関が「渡来説」を提示する以前、主として彼が台北帝国大学医学部教授として植民地台湾に在任した時期の自然人類学研究について検討してみたい。それによって金関の「渡来説」の意義もより明らかになると考えるからである。

近年、金関の台湾時代、さらには京都帝大大学院生時代の人類学研究には、盗骨にもとづくものが含まれていたことが指摘され、倫理的観点から問題化されている。この状況を受け、国立台湾大学（旧台北帝大）に所蔵されていた金関収集の人骨については、故地への返還もある程度進んでいる。だが一方、主として院生時代に沖縄で収集した人骨については、現在まで保管してきた京都大学の対応が批判を集めている[3]。

本報告では盗骨問題そのものを直接の主題とはしない。しかしここで留意すべきは、盗骨という行為から想起される「帝国（植民地）主義者」「知の暴力」の体現者といった金関批判とは対照的に、彼を「ヒューマニスト」と評価する言説も多く存在することである。こうした相反する評価が並存するなかで、最終的には金関の人類学研究と盗骨行為の関係についても筆者なりの考察を提示したいと考えているが、本報告はそのための準備作業という意味も有する[4]。

本報告ではまず筆者の以前の研究（拙著『縄文人と弥生人』）にもとづき、戦後の金関説（「渡来説」）の概略を示したうえで、台湾期の自然人類学研究とそれにもとづく「日本人」（アジア人）論、さらに日本帰国直後、金関が実施した調査の足跡について、ラフ・スケッチを試みる。

金関丈夫の「渡来説」

金関丈夫は台湾から帰国後の1950年に九州大学医学部解剖学（第二講座）教授に就任した。九大での教育のかたわら、金関は各地で精力的に発掘調査を進めていくが、彼が「渡

来説」と呼ばれる日本人起源論を提唱する契機となったのは、1950 年代の三津永田遺跡（現・佐賀県吉野ヶ里町）および土井ヶ浜遺跡（現・山口県下関市）における弥生人骨の大量発見であった。

明治期以来、「日本人」起源論は主として古人骨や生体計測などにもとづいて議論されてきたが、ここで注意したいのは、日本人起源論のおもな材料となる古人骨の大半が縄文人骨であり、弥生人骨は極端に少なかったことである。日本列島は酸性土壌のため古人骨が残りにくいが、縄文人骨は貝塚の中和作用により比較的保存されてきたのに対して、弥生時代には貝塚が少なく、期間も短いため、人骨の発見は長らく困難だったのである。

だが、金関率いる解剖学教室は三津永田遺跡で約 30 体、その後、土井ヶ浜遺跡では計 207 体にのぼる、甕棺や石棺などに埋葬された大量の弥生人骨の発掘に成功した。こうして 1955 年、金関は『日本考古学講座』に、「人種の問題」と題する論考を発表する。そこで彼は、その時点で利用可能だった弥生人骨の計測データにもとづき、「日本石器時代人」「弥生時代人」「日本古墳時代人」に関する次のような「もっとも容易な憶説」を示すことになった。

> 弥生文化とともに、頭長、頭幅、頭長幅示数の点では、日本石器時代人と大差のない、しかし、身長の点では、遥かに後者を凌駕する、新しい種族の相当な数が、新渡の種族として日本島に渡来し、北九州地方のみならず、畿内地方にまでひろがった。しかるに、これにはその後ひきつづいて渡来する後続部隊がなかった。また、その数においては、在来の日本石器時代人に比して遥かに少なかったから、時代を重ねるとともに、その特異の形質、すなわち長身が、しだいに、在来種の中に拡散し、吸収されて、ついにその特徴を失うに至った[5]。

その後、金関の日本人起源論は、土井ヶ浜遺跡などで発掘した、より詳細な弥生人骨の計測データにもとづいて、本格的な理論＝「渡来説」へと練り上げられていく。

そして、以上の新説は、同時代の考古学者にとって歓迎すべきものだった。詳細は省くが、1930 年代以降、多くの考古学者が弥生文化の北部九州への伝播を想定するようになっており、文化の伝播に人の渡来がともなうという理解は自然だったからである。

しかし一方、1950 年代当時、「日本人」起源論の議論は自然人類学者の領分とみなされ、かつその主流は、海外から日本列島への渡来を否定していた。たとえば、戦前以来、日本を代表する人類学者と目されていた長谷部言人（東大理学部人類学教授）は、日本列島における大規模な混血を否定し、列島内での「小進化」により現代日本人が形成されたと主張していた。この見解は後継者の鈴木尚に受け継がれ、1964 年には「変形説」として理論化される。したがって、金関の「渡来説」は人類学者と考古学者のあいだの隔たりを埋める理論だったのである。

その後の「日本人」起源論の展開は本稿の範囲外だが、徐々に金関の支持者は増え、鈴木も事実上これを容認するようになっていく。金関が想定していた渡来人の規模はあくまでごく少数だったものの、「縄文人」が居住する列島に「弥生人」が渡来し、混血によって現代日本人が形成されたとする発想は受け継がれていった。そして、こうした発想をもとに、1991 年に埴原和郎（国際日本文化研究センター）が提唱した「二重構造モデル」は、

その後、長きにわたり定説とみなされるようになったのである[6]。

台湾と「東亜諸民族」の人類学

以上駆け足で金関の「渡来説」についてみてきたが、九大医学部を拠点に九州・山口などで発掘調査を進める以前、彼がもっとも長く教鞭をとったのは植民地台湾に設置された台北帝国大学医学部であった。さらに金関は日本敗戦後も台湾に留用され、台北帝大の後進である国立台湾大学でも四年間教えたので、台湾での研究期間は、1936 年 4 月から 1949 年 8 月までの 13 年以上に及ぶ。

ここで、【付録】で示した「年譜」にもとづき、金関が人類学の道に進んでから台湾赴任までの履歴を簡単に確認しておこう。彼が本格的に人類学の道に進んだのは、京都帝大医学部卒業後、足立文太郎（人類学者）が主宰する解剖学教室の助手となってからのことである。足立の勧めにより、医学部の清野謙次（病理学者・人類学者）、文学部の浜田耕作（考古学者）の薫陶を受けるようになった。その後、足立に命じられた沖縄などでの古人骨調査[7]にもとづく研究で博士号を取得し、1934 年から 2 年間の在外研究を経て、36 年 4 月に台北帝国大学医学部解剖学教授に就任した（以上「履歴」参照）。

そして、台湾赴任後、金関は台湾およびその周辺地域で膨大な数の人骨発掘と生体計測を進めていく。すでに触れたように、彼の学問的関心は多岐にわたり、たとえば彼が中心となって刊行された雑誌『民俗台湾』は台湾における初の総合的民俗雑誌として注目に値するが、ここでは自然人類学研究以外は扱わない。

ともあれ、ここで台湾時代に金関研究室がおこなった人類学調査（対象としたエスニックグループおよび採集地）を、人骨資料（骨格材料）と生体調査（生体計測）に分けて表 1 にまとめておく。なお、台湾には多数派である漢族（さらにその下位グループ）のほか、台湾原住民（当時の呼称は高砂族または生蕃）、さらに原住民のうち平地居住で中国化が進んだ「平埔族」に分けられていた（[] 内は現在の呼称）。

（骨格材料）		
A 台湾在住民族		
福老系台湾人（漢族）		ほとんど全島
客家系台湾人（漢族）		新竹州竹東郡下、高雄州屏東郡
鳥牛欄平埔族		台中州埔里鳥牛欄
西螺平埔族		台南州西螺平埔族旧墓地
原住民	タイヤル［セデック］	台中州霧社（＊）
	パイワン	高雄州、台東州各地
	ブヌン	台東州
	ヤミ［タオ］	紅頭嶼［蘭嶼］
（先史時代人骨）	墾庁寮石棺遺跡人骨	高雄州恒春郡墾庁寮
	鳥山頭人骨	台南州曽文郡鳥山頭遺跡
B 台湾以外の諸民族		
（中国先史時代	河南省安陽殷墟・山東	南京博物館所蔵

人骨）	省竜山鎮城子崖遺跡発掘人骨	
	南京地方人骨（現代華中漢族）	同上
福老系海南島人（漢族）		海口市郊外墳墓骨（＊）
華南漢族		ライデン市民族博物館所蔵
琉球人		主として沖縄本島
（生体材料）		
A 台湾在住民族		
福老系台湾人（漢族）		台中地方の「正常人」 台北市楽生園収容のハンセン病患者
客家系台湾人（漢族）		新竹州地方
平埔族		台北州羅東のケタガラン
		新竹州新港地方のタオカス
		台中州大社のパゼヘ
		同島牛欄の主としてパゼヘ
		台南州頭社のシライヤ（タバニー支族）
		同左鎮のシライヤ
		高雄州万巒庄の旧茄藤蕃及び旧放〇蕃
原住民	タイヤル	花蓮港庁チャカン社、タッキリ社、台北州南澳社、台中州霧社［セデック］ 台北州内横屏社（ツォーレー社）
	サイシャット	新竹州ガロワン社、ワロ社
	ツォウ	台南州トフヤ社、タッパン社
	ブヌン	台中州主としてカトグラン社（イシプクン支族）
	パイワン	高雄州ライ社（ブトウル支族）
	ルカイ	台東州大南社
	プユマ（あるいはパナパナヤン）	台東州ピナン社
	アミ（パンツァー）	台東州馬蘭社、新港社、都蠻社、花蓮港庁主として田浦社
	ヤミ［タオ］	紅頭嶼イワギヌイ社、モウロッド社、イヤニウ社、イラタイ社
（ほかに同郷出身者の子孫である福老系部落民（高雄州）について、生活法による体質調査を実施）		
B 台湾以外の諸民族		
（１）大陸及び海南島		
漢族		湖南省、江西省、浙江省、福建省出身の中

	国兵員
同	広東市民
同	珠江蜑民
海南島漢族	瓊山市、文昌県、博鰲港、海南島熟黎（列楼付近）（＊）
海南島黎族	黎族及び美孚族（保定、東方、重合、水頭諸地方）（＊）
海南島回教徒	三亜街（＊）
（２）その他	
琉球与那国島島民	与那国島
アンボン人	モルッカ諸島アンボイナ島
ミナハサ	セレベス島マカッサル付近

（表１：台湾時代の自然人類学調査）

個々の調査内容には踏み込まないが、この表からは、台湾島を中心に非常に広範囲で調査を実施していたことがうかがえる。金関自身は当初、台湾に骨を埋める覚悟だったようなので、日本敗戦（あるいは台湾の日本からの離脱）がなければ採集数はもっと増えていただろう。

ただし、次の二点には注意を要する。第一に、台中州霧社で採集されたタイヤル（セデック）の人骨は、1930 年に起こった有名な原住民の蜂起事件（霧社事件）の犠牲者の遺骨である[8]。第二に、海南島における人骨採集（および生体計測）は、1939 年 2 月の日本海軍による海南島占領後、台北帝大（理農学部）が企画した海南島学術調査（第 1 次、40 年 11 月～41 年 3 月)およびその後金関が現地軍から依頼されて実施した調査の際のもので、いずれも墓地からの盗骨を含む調査である[9]。

そして、ここで見逃せないのが 1952 年に発表された「台湾居住民族を中心とした東亜諸民族の人類学」である。これは、台湾時代の調査材料にもとづく自然人類学研究の総決算とも呼ぶべき論考（もとは 1951 年の福岡医学会における特別講演）だが、そのなかで彼は、台湾およびその周辺地域の諸民族は、台湾のアミ（原住民)、フィリピンのタガログ族、中国北東部のバルガ族の三者（「頂点」）のあいだに位置付けることができるという興味深い指摘をおこなった。

> 全群は一の三角図をなし、その三頂点にそれぞれアミ族（台湾)、タガログ族（フィリピン)、バルガ族（蒙古）の三者が在り、その第一の頂点（アミ族）の近くケンヤ（北部ボルネオ)、平埔（台湾)、タイヤル（台湾）の一団、第二の頂点（タガログ）の近くにヤミ族（紅頭嶼)、◯族（黎)、ニアス島人（スマトラ）の一団、第三の頂点（バルガ）の近くに朝鮮人、南北九州地方人、及び琉球人の集団がそれぞれ位置する。南北中華人は第二団と第三団との中間に在ると見ることができる[10]。

こうした金関の考察の意義を評価することはなかなか難しいが、少なくともこの時点で

彼が「日本人」を中核に考えていないことは明らかである。その意味についてはあとでまた述べよう。

帰国から「渡来説」まで

先に述べたとおり、金関は 1950 年 8 月に台湾を引き揚げ日本に帰国、翌 51 年 4 月から九大医学部につとめるようになった。その後、「渡来説」が発表される 55 年までのあいだに金関が調査した地域と調査方法についてまとめたのが、以下の表 2 である。

1950 年	8 月、福岡県山門郡両開村、大和村（生体調査） 12 月、熊本県御領貝塚（発掘）
1951 年	7 月、壱岐原の辻遺跡（東亜考古学会、発掘） 7 月、福岡県宗像郡大島、糟屋郡志賀島（生体調査） 9 月、島根県日御碕、八東郡野波村（生体調査）
1952 年	7 月、壱岐原の辻遺跡（発掘） ８月、山口県野島、向島（生体調査） 9 月、福岡県朝倉郡小石原、山口県角島（生体調査）
1953 年	8 月、壱岐原の辻遺跡（発掘） 8 月、大分県姫島（生体調査）、山口県見島（生体調査） 10 月、山口県土井ヶ浜埋葬遺跡、佐賀県三津永田の甕棺埋葬遺跡
1954 年	3-4 月、沖縄波照間島（生体調査、下田原貝塚発掘）、八重山諸島、沖縄本島羽地（生体調査） 7 月、山口県周防大島（生体調査） 7-8 月、長崎県カラカミ貝塚（発掘） 8 月、福岡県京都郡蓑島（生体調査）、志賀島弘部落（生体調査）、山口県青海島（生体調査） 9 月、土井ヶ浜（発掘）
1955 年	7 月、土井ヶ浜（生体調査）、福岡県浮羽郡吉井（生体調査） 7-8 月、与論島（九学会連合奄美調査団、生体調査、人骨調査、考古学調査） 8 月、佐賀県東背振（生体調査） 9 月、土井ヶ浜（発掘） 11 月、福岡県若松市岩屋（発掘）

（表 2 :「渡来説」以前の国内調査）

ここからは、金関が九州から山口を中心に幅広く現地調査を進めていた状況がうかがえる。しかし、その中心は遺跡の考古学的発掘と生体調査（計測）であり、人骨採集はほとんどおこなわれていない。この時期、日本国内で墓地から遺骨を収集（盗骨）すれば重大な問題となったことは確実である。したがって、戦前の沖縄や台湾における人骨収集が「植民地主義」「帝国主義」と指摘されるのにも無理はないが、この点の詳しい検討は今後にゆずりたい。

また、土井ヶ浜遺跡の大量の弥生人骨の発見とそれに続く「渡来説」があまりに有名なため見落とされがちが、この時期の金関の調査地域は九州、山口から鹿児島県奄美群島[11]、さらに復帰以前の沖縄（先島諸島含む）まで広がっている。この時点での金関の研究は、大学院生時代以来の「南島」への関心から当時可能な南方で調査をおこなったものであり、「日本人」起源論としての「渡来説」はむしろその副産物とみなすべきだろう。

さらに、台湾で原住民・平埔族・漢族など多様な民族を対象に人類学研究を進めてきた金関にとって、アジアの諸民族が相互に関係し、先史時代以来移動を繰り返してきたことはいわば所与の前提であった。とりわけ台湾では少数民族である台湾原住民と漢族のあいだで混血が進むなかで平埔族も生まれていた。そうしたエスニックグループ相互の関係を目の当たりにした経験をもつ金関にとって、日本人の祖先だけが日本列島に閉じ込められ、そこで独自の「小進化」を遂げたという見解は受け入れ難いものだっただろう。したがって、土井ヶ浜遺跡などで弥生人骨が大量に発見された後、その担い手の中国大陸からの「渡来」を想定したのは、むしろ当然の帰結だったと考えられる。

むすびにかえて

以上、本報告では、台湾（台北帝大・国立台湾大学）時代から九大時代初期の金関の人類学研究の展開を概観し、「渡来説」形成の前提となる台湾時代の研究の意義について考えてきた。台湾時代の人類学研究において、在来のグループと後来のグループのあいだの関係について、金関が具体的にそのような分析をおこなっているかを検討するのが、今後の課題である。

注

---

[1] 金関の日本人起源論は、彼の人類学上の師である清野謙次の理論（1885-1955）と一括して「混血説」と呼ばれることがある。だが、両者には大きな違いがあるため、本稿では「渡来説」という呼称に統一する。

[2] 井本英一「解説」金関丈夫『お月さまいくつ』（法政大学出版局、1980 年）など。

[3] 板垣龍太「人類学京都学派と台湾――京都帝大解剖学第二講座の人骨研究の系譜」『二十世紀研究』21 号（2020 年 12 月）。

[4] 簡単にではあるが、以前その問題については論じたことがある。拙稿「骨・土器・ゲノム――人類学・考古学史のヒストリオグラフィーについて」『生物学史研究』104 号（2024 年 10 月）。

[5] 金関丈夫「人種の問題」『日本考古学講座 4 （弥生文化）』（河出書房、1955 年）。

[6] 近年、「二重構造モデル」への批判が盛んになり、むしろ「三層（多層）構造モデル」と捉えるべきだという説が有力になりつつある。近年の日本人起源論をめぐる状況については、篠田謙一『人類の起源』（中公新書、2022 年）などを参照。

[7] このとき沖縄の百按司墓で金関の収集した人骨が現在問題になっている遺骨返還問題の中核となるものである。

[8] 板垣、前掲論文。

[9] かつて浜田耕作の学生だったねずまさし（禰津正志、歴史学者）の回想によれば、金関もこのときの発掘調査については後ろめたい気持ちがあったようである。ねずまさし「『ドルメン』で思い出すことども」『えとのす』21 巻 1 号（1983 年）。

[10] 金関丈夫「台湾原住民族を中心とした東亜諸民族の人類学」『形質人類誌』(法政大学出版局、1978)。
[11] 九学会連合の奄美共同調査（1955-57 年）における金関の与論島調査（55 年度）については、以前論じたことがある。拙著『フィールドワークの戦後史――宮本常一と九学会連合』(吉川弘文館、2012 年)。

【参考文献】
板垣竜太「人類学京都学派と台湾――京都帝大解剖学第二講座の人骨研究の系譜」『二十世紀研究』21 号（2020 年 12 月）
井本英一「解説」金関丈夫『お月さまいくつ』(法政大学出版局、1980 年)
金関丈夫「台湾原住民族を中心とした東亜諸民族の人類学」『形質人類誌』(法政大学出版局、1978 年)
金関丈夫「人種の問題」『日本考古学講座 4 （弥生文化)』(河出書房、1955 年)
坂野徹『フィールドワークの戦後史――宮本常一と九学会連合』(吉川弘文館、2012 年)
坂野徹『縄文人と弥生人――「日本人の起源」論争』(中公新書、2022 年)
坂野徹「骨・土器・ゲノム――人類学・考古学史のヒストリオグラフィーについて」『生物学史研究』104 号（2024 年 10 月）
篠田謙一『人類の起源――古代 DNA が語るホモ・サピエンスの「大いなる旅」』(中公新書、2022 年)
ねずまさし「『ドルメン』で思い出すことども」『えとのす』21 巻 1 号（1983 年）

【金関丈夫年譜】

1897年　2月18日、父喜三郎、母たみの長子（二男一女）として香川県仲多度郡榎井村（現琴平町）に生まれる。家は曽祖父の代まで近郷の神職、父は陸軍、国鉄、専売局などの建築請負を業務とする。両親はメソジスト教会の信徒であり、幼児洗礼を受ける。

1903年　4月、榎井村尋常小学校入学。

1907年　3月、同卒業、4月、琴平町の高等小学校入学。

1908年　4月、父親の任地（陸軍第十七師団司令部技手）である岡山に引っ越し、内山下小学校6年に転入、同級生に佐藤（岸）信介（のちの首相)、山辺寛一（のちの出羽海）がいた。

1909年　4月、祖父母に預けられ、福岡県若松の修多羅高等小学校入学。

1910年　4月、岡山の両親のもとに帰り、県立中学を受験するも失敗。閑谷黌（元は岡山藩により開かれた学校）に入学、岡山組合教会少年隊に入る。

1911年　9月、父の転任で松江市に移る。県立松江中学校2年に転入。

1913年　友人と同人雑誌『野人』を刊行、両親とともに聖公会松江基督教会に転籍、牧師（永野武二郎）より強い影響を受ける（中学校教師後藤蔵四郎にも影響を受ける)。

1914年　5月、英人宣教師（ヒウ・J・フォス）より按手式を受ける。秋、松江教会の創立者バークレー・F・バックストンの説教に霊感を受ける。

1915年　3月、松江中学卒業、7月、第三高等学校三部（医学）の入試に失敗し、1年浪人。

1916年　9月、第三高校三部入学、YMCA寄宿舎（「地塩寮」）生となる。トルストイの影響で菜食主義者に（半年のみ)。

1917年　3−4月、大和の古寺社回り、日本の古代美術への関心。

1918年　12月～内村鑑三の京都講演に出席、『聖書研究』の購読開始。

1919年　2月、上京して新人会学生青年会の集会に参加。3月、朝鮮三・一運動に衝撃を受ける。七月、三高卒、九月、京都帝大医学部入学、坂田徳男（哲学者）が旧友、聖公会南御所寮（岡崎町）に入る。

1920年　4月、京都帝大YMCA寮に入る。

1922年　4月、銀閣寺近くの農家に下宿、クラシックへの造詣を深める。

1923年　3月、京都帝大医学部卒業、解剖学教室助手に（先輩に今村豊［人類学者］)。徴兵検査を受け、甲種合格。

1924年　足立文太郎（人類学者）の勧めで清野謙次（病理学者)、浜田耕作（考古学者）に入門。浜田が主宰する「カフェ・アルケオロジー」の常連となる。3月、結婚（京都聖公会事務である小野鈴蔵の四女みどり)。これ以降、岳父から古美術鑑賞の指導を受ける。4月、一年志願兵として伏見第三十八連隊入営。6月、病気で現役免除。

1925年　4月、京都帝大助教授、骨学講義開始。足立の講義を一年聴講。

1926年　3月、毅（長男、解剖学者）誕生、4月、大谷大学教授を嘱託（−1934年まで隔年担当)。

1927 年　4 月、京大文学部史学科の人類学講義担当（足立の後任、隔年担当）、11 月、恕（次男、考古学者）誕生。
1928 年　9 月、上京して民俗学談話会に出席、柳田國男（民俗学者）の謦咳に接する。12 月、京都滞在中の日高アイヌ 19 名の調査、12 月末、琉球調査に出発。
1929 年　1 月、琉球人手掌紋の調査、琉球各地の人骨収集。2 月～三宅宗悦らと毎月人類学談話会。4 月、大阪女子医専講師兼任。7 月～雑誌『ドルメン』発行計画に関わる。京都民芸同好会結成。
1930 年　9 月、「琉球人の人類学的研究」で医学博士。11 月、E・リサン（神父、考古学者）が来訪。河套人大腿骨を見る。
1931 年　5 月、人類学談話会の遠足会で明石人骨発見地を見学（直良信夫の案内、同行は小牧実繁［地理学者］、有光教一［考古学者］、三宅宗悦［人類学者］ら）
1932 年　7 月、S・カルレンフェルス（ジャワの考古学者）来訪。
1933 年　4 月、三宅とともに東亜考古学会の関東州羊頭窪発掘調査へ、5 月末、発掘終了後、満洲、朝鮮各地を見学し、6 月帰学。
1934 年　9 月、台湾総督府医学専門学校教授の資格で在外研究へ。台湾からマルセイユへ。10 月 28 日、マルセイユ着。11 月パリ着。11 月 10 日よりパリ植物園近くに下宿、「人類学研究所」に通う。11 月末、澤潟久孝（国文学者）とともにスペイン・ポルトガル旅行へ（12 月 16 日パリに戻る）。人類学研究所で、博物館所蔵のフィリピン人頭蓋の計測開始（翌年 3 月初めまで）。インドの人類学者 B・S・グハと親しくなる。
1935 年　3 月中旬から古人類研究所へ。下旬からノルマンディ、ブルターニュ地方旅行（カルチック遺跡見学など）。4 月 2 日ベルリンへ。5 日、ダーレムの J 家に下宿、カイザー・ヴィルヘルム研究所の人類学研究室（主任オイゲン・フィッシャー［優生学者］）に通う。6、7 月、ドイツ、スイス、オーストリア各地を歴訪（ネアンデルタール遺跡、各種古人骨の実見、O・シュラーゲンハフフェン、Th・モリゾンなどの研究者と会う）。8 月、神田喜一郎（東洋学者）とともに北欧旅行（B・カルグレン、J・G・アンダーソンに会う）。オスロから単独でイギリスへ。エディンバラで旧友佐原六郎（社会心理学者）と会い、ともにアイルランドへ。8 月下旬、ロンドンへ。9 月、博物館、王立外科学校などの古人骨を見る。下旬、佐原とともにベルギー、オランダ各地を経てベルリンに戻る。10 月、S・ヘディン（探検家）の中央アジア探検の講演を聞く。10 月、佐原とともにプラハ、ウィーン、ブダペストなどを経てイタリアへ。スイスを経てベルリンに戻る。12 月、ハンブルク、パリを経てロンドンへ。
1936 年　1 月 15 日、アメリカへ。ニューヨークでシャピロ、ネルソン（自然科学博物館）、ワシントンで A・ヘリチカ（人類学者、スミソニアン研究所）と会う。2 月 20 日、太洋丸（日本郵船）でサンフランシスコ出航、26 日ホノルルへ（二・二六事件の号外）。3 月 8 日、横浜着。7 日付で台北帝大教授に任命。3 月下旬、台湾赴任、森於菟（解剖学者、森鴎外の長男）とともに新教室整備。7 月、霧社で発掘、タイヤルの人骨 100 体あまり採集。12 月、三男（悳）誕生。漢族の墓から多数人骨収集。
1937 年　日中戦争開戦。
1938 年　1 月、浜田耕作（京大総長）を台湾案内。3 月、浅井恵倫（言語学者）、宮本延人（民族学者）と台中州埔里太馬隣の石棺埋葬遺跡発掘、8 月、花蓮港庁チャカン、タッキ

リのタイヤル生体調査、10 月、京大文学部の人類学講義再開（隔年)、同月台中州霧社、内横屏のタイヤル生体調査。

1939 年　7 月、阿里山ツォウの生体調査。11 月、新竹州ガラワン社などのサイセット、高雄州ライ社のパイワンの生体調査。

1940 年　第 1 次台北帝大海南島調査隊参加。

1941 年　1 月、海南島各地住民の手掌紋採集、香港を経て帰台。7 月、『民俗台湾』創刊。8 月、母病死。同月壱岐島民の手掌紋採集。12 月、高雄州郡大社のブヌンの生体調査。同月太平洋戦争開戦。

1942 年　1 月、移川子之蔵（民族学者)、宮本延人、国分直一（民族学者）らと台南州大湖遺跡発掘調査。4 月－5 月、浅井とととともに海南島調査へ。重合盆地の〇族調査。8 月、台南州西螺の平埔族埋葬地発掘、人骨採集。12 月、花蓮港庁吉野庄のアミの生体調査。

1943 年　3 月、東亜考古学会の関東州羊頭窪報告書刊行。同月柳宗悦（民芸運動家）来台し、案内して台湾一周。同月、台東庁新港、都蠻、馬蘭のアミの生体調査。6 月『胡人の匂ひ』出版。8 月 3 日、父病死（83 歳)。同月、国分とともに台中州営埔遺跡発掘。9 月基隆社寮島石棺埋葬遺跡発掘、新竹修鶯歌の陶窯調査。11 月国分と淡水の江頭貝塚発掘。12 月台北市内万華有明町の貝塚発掘。同月、台東庁卑南のブヌンの生体調査。

1944 年　3 月中国出張。南京博物館の安陽、城子崖などの人骨調査、4 月西湖博物館（杭州)、黄河白河博物館（天津)、歴史博物館（北京）などの先史遺物を調査。5 月帰学。6 月円山貝塚発掘。

1945 年　1 月、国分と台東州卑南の遺跡発掘中、アメリカ艦載機に狙われる。台北から新竹州大渓に疎開。8 月 15 日、現地で敗戦。9 月、台北に戻る。

1946 年　2 月、国分とともに新竹州竹山の石棺遺跡発掘。3 月、長男・次男は第一次送還船で帰国。

1947 年　2 月、中華民国に留用され国立台湾大学教授。同月台南州大内の平埔族の生体調査。台南で二・二八事件勃発を知る。5 月、台湾大学蘭嶼科学考査団に参加、紅頭嶼でヤミの生体調査。

1948 年　5 月、小琉球嶼の漁民の生体調査、国分とともに同島の考古学調査

1949 年　8 月、帰国、佐世保港着。京都へ。

1950 年　1 月、九大教授発令（医学部解剖学教室第二講座)。8 月、福岡県山門郡両開村、大和村生体調査。6 月、朝鮮戦争開戦。12 月、熊本県御領貝塚発掘。

1951 年　7 月、東亜考古学会壱岐原の辻遺跡調査。同月宗像郡大島、糟屋郡志賀島の生体調査。9 月、島根県日御碕、八束郡野波村の生体調査。

1952 年　4 月、日本解剖学会の総会で特別講演（「台湾居住民族を中心とした東亜諸民族の人類学」)。7 月、壱岐原の辻遺跡調査参加、8 月、山口県野島、向島生体調査、9 月、朝倉郡小石原、山口県角島生体調査。

1953 年　8 月、壱岐原の辻遺跡調査参加。同月、大分県姫島の生体調査。同月、山口県見島生体調査。10 月、同土井ヶ浜埋葬遺跡発掘調査。佐賀三津の甕棺埋葬遺跡調査。11-12 月、太平洋学術会議のためマニラ出張。台湾懇丁寮発掘人骨について報告。イゴロット、イフガオの村落見学。

1954 年　3-4 月、国分、永井昌文（人類学者)、酒井卯作（民俗学者）らと琉球波照間島調

査。生体調査、下田原貝塚発掘、八重山諸島調査。帰途、沖縄本島羽地（現・名護市周辺）の生体調査。7 月、周防大島島民の生体調査。7-8 月、カラカミ貝塚の調査に参加。8 月、京都郡蓑島の生体調査。同月、志賀島弘部落の生体調査、同月、山口県青海島の生体調査、9 月、土井ヶ浜の発掘。

1955 年　4 月、『木馬と石牛』刊行。7 月、土井ヶ浜の生体調査。浮羽郡吉井の生体調査。7-8 月、九学会連合奄美調査で与論島調査（生体調査、人骨調査、考古学調査）。8 月、佐賀県東背振の生体調査。9 月、土井ヶ浜発掘。11 月、若松市岩屋の発掘調査。

1956 年　6 月、島根県川本町の生体調査。6-7 月、山口県王喜地区の生体調査。7 月、島根県川本町の生体調査。8 月、福岡県茶屋、対馬曲の海女、壱岐八幡浦海島の生体調査。同月、九学会連合奄美調査で喜界島の生体調査、沖永良部島の人骨採集。9 月、鐘先海女の生体調査。土井ヶ浜発掘。

1957 年　1 月、東亜考古学会の唐津市宇汲田遺跡発掘に参加。7 月、佐賀県大入島の生体調査。7－8 月、土井ヶ浜遺跡発掘。10 月、日本人類学会・日本民族学協会連合大会主宰（九大）。

1958 年　7 月、鹿児島県成島遺跡発掘調査に参加。8-9 月、国分らと鹿児島種子島広田遺跡発掘。

1959 年　7-8 月、種子島広田遺跡発掘。

1960 年　3 月、九大定年退職。4 月、鳥取大学教授（医学部解剖学教室）。松江市に移転。7－9 月、第六回国際人類学・民族学会議出席のためパリ出張。「古代中国における抜歯風習」講演。オランダ、イギリスを巡見後帰国。12 月-翌 1 月、山口県中ノ浜発掘。

1961 年　9 月、大分県日出発掘。12 月-翌 1 月、島根県古浦遺跡発掘。

1962 年　3 月、大分県生台地の旧石器調査。同月、鳥取大定年退職。4 月、山口県立医大教授。7 月、山口県吉母遺跡発掘。8 月、古浦遺跡発掘。

1963 年　3－4 月、大分県尾津留遺跡調査。7－8 月、古浦遺跡発掘。11 月、尾津留遺跡発掘。

1964 年　2 月、大分県早水台遺跡調査に参加。3 月、山口医大定年退職。4 月、帝塚山大教授。7－8 月、古浦遺跡発掘。12 月、松江市より天理市に移転。

1965 年　7－8 月、12 月、山口県郷台地遺跡発掘。

1966 年　7－8 月、郷台地発掘。

1967 年　7－8 月、郷台地発掘。2 月、古希記念論集『日本民族と南方文化』刊行（編集委員：池田敏雄［民俗学者］・大林太良［民族学者］・岡崎敬［考古学者］・国分直一・坪井清足［考古学者］・永井昌文・中村哲［政治学者］）。8 月、山口県郷台地遺跡発掘。1-12 月、天理市岩室の民俗調査指導。

1968 年　8 月、第八回国際人類学会開催、副会頭に選出。1-12 月、和歌山県日高郡由良町小引浦、兵庫県飾摩郡家島町坊勢島の民俗調査指導。

1970 年　4 月、和歌山県磯間遺跡発掘に参加。

1971 年　3 月、山口県中ノ浜遺跡発掘に参加。

1972 年　10 月、朝鮮学会第 23 回大会「百済武家王陵をめぐって」シンポジウムに参加。

1975 年　5 月、日本民族学会第 14 回大会世話役となり、「神々の世界」について特別発表（パネルディスカッション）。9･10 月奄美大島の人類学調査（福本雅一［中国史］と同行）。

1979 年　1 月、「南島の人類学的研究の開拓と弥生時代人研究の業績」により朝日賞受賞。3 月帝塚山大定年退職。以降、自宅で著作集編纂作業。
1983 年　2 月 27 日、逝去。

＊「金関丈夫年譜」『お月さまいくつ』（法政大学出版局、1980 年）をもとに坂野が加筆修正した。

日本大学経済学部グローバル社会文化研究センター
ワーキング・ペーパー・シリーズ　No.2025-03

2026年3月1日　発行
発行元　日本大学経済学部グローバル社会文化研究センター
〒101-8360　東京都千代田区神田三崎町1-3-2
TEL 03-3219-3309 / FAX 03-3219-3329
URL：https://www.eco.nihon-u.ac.jp/research/cgs/